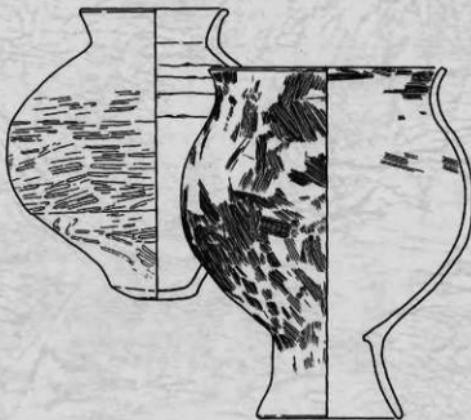


神 祖 遺 跡

—宅地造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—



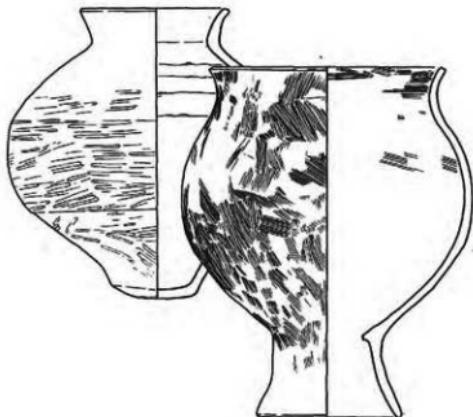
2009

富士宮市教育委員会

富士宮市文化財調査報告書第41集

神 祖 遺 跡

—宅地造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—



2009

富士宮市教育委員会

例 言

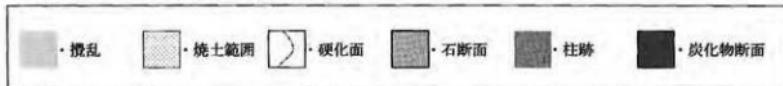
1. 本書は、宅地造成工事に先立ち、静岡県富士宮市小泉字神祖1577番1で実施した神祖遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、ハウジングフジマサの計画による宅地造成工事に伴う事前の発掘調査として富士宮市教育委員会が実施した（富教文第224号、平成20年5月28日付）。
3. 発掘調査は、平成19年9月25日から10月3日に富士宮市教育委員会が実施した確認調査の成果を受け、平成20年6月18日から8月6日の期間で現地調査を行った。
4. 発掘調査の面積は、532m²である。
5. 発掘調査における整理作業及び本書刊行事業は、平成20年8月～平成21年3月まで実施し、平成21年3月20日に本書を刊行して終了した。
6. 発掘調査の体制は以下の通りである。

調査主体	佐野敬祥（富士宮市教育委員会教育長）
調査担当	渡井英誓（富士宮市教育委員会教育文化課学芸員）
	佐野恵里（富士宮市教育委員会教育文化課嘱託員）
現地作業	大平美奈子 金森弘毅 斎藤之弘 堤健一 古郡善明 山崎英美子 渡辺剛 渡辺敏雄
整理作業	佐藤節子 渡辺麻里
7. 写真の撮影は、渡井、佐野が行った。
8. 発掘調査に関する出土遺物、実測図、写真等は、すべて富士宮市教育委員会で保管している。
9. 発掘調査にあたり、次の方々からご指導、ご協力を賜った。記して感謝申し上げる次第である。
(敬称略、順不同)
植松章八 遠藤のり江 平野吾郎 向坂鋼二 静岡県教育委員会文化課 株式会社東日

凡 例

1. 調査区におけるグリッド設定は、調査区に合わせて任意に設定した。
2. 地形図、遺構実測図中の標高は、すべて海拔高度をもって示し、単位はメートル(m)とする。
3. 遺構実測図等の方位は真北を示す。
4. 遺構の略号は次の通りである。

S B	・	堅穴住居址	SK	・	土坑	SD	・	溝
-----	---	-------	----	---	----	----	---	---
5. 土器觀察表、石器觀察表の長さの単位はセンチメートル(cm)である。()は推定値を表す。
6. 土層觀察及び土器觀察表に記載した色調は、『新版標準土色帖』(農林水産省農林水産技術会議事務局監修)を参考にした。
7. 挿図中のトーンは、以下を表している。



8. 挿図の縮尺は、各図中に示すとおりである。
9. 写真図版の縮尺はすべて任意である。

目 次

第Ⅰ章 はじめに	1	第9図 SB03・SB04実測図	7
1. 調査の経緯	1	第10図 SB05実測図	8
2. 調査区の設定	1	第11図 SB06・SB07・SB08実測図	9
3. 調査区の設定	1	第12図 SB09・SB10・SB11・SB12 実測図①	11
第Ⅱ章 遺跡の環境	1	第13図 SB09・SB10・SB11・SB12 実測図②	12
1. 自然環境	1	第14図 SB09・SB10・SB11・SB12 実測図③	13
2. 歴史環境	2	第15図 SB13実測図	14
3. 層序	4	第16図 SB14・SD01・SD02実測図	16
第Ⅲ章 遺構	5	第17図 出土遺物実測図①	18
1. 積穴住居址	5	第18図 出土遺物実測図②	19
2. 溝状造構	15	第19図 出土遺物実測図③	20
3. 土坑	16	第20図 出土遺物実測図④	21
第Ⅳ章 遺物	16	第21図 出土遺物実測図⑤	22
1. 遺構出土	16		
2. 遺構外出土	20		
第Ⅴ章 まとめ	21		
1. 遺跡の年代	21		
2. 集落の変遷	22		
3. おわりに	23		
報告書抄録	25		

写真目次

写真1 調査区全景(南西部)	写真図版1
写真2 調査区全景(南東部)	写真図版1
写真3 SB01	写真図版1
写真4 SB06	写真図版1
写真5 SB09～SB12	写真図版1
写真6 SB09炉址	写真図版1
写真7 SB11炉址	写真図版1
写真8 SB09貯蔵穴	写真図版1

挿表目次

第1表 遺跡一覧表	4
第2表 土器観察表①	24
第3表 土器観察表②	24
第4表 石器観察表	24

挿図目次

第1図 富士宮市位置図	1
第2図 調査位置図	2
第3図 富士宮市域地質略図	3
第4図 周辺遺跡分布図	4
第5図 標準土層図	4
第6図 遺構全体図	5
第7図 SB01実測図	6
第8図 SB02実測図	6

写真9 SB11壺(N.33)出土状況	写真図版1
写真10 SB13	写真図版2
写真11 SB13炉址	写真図版2
写真12 SB01出土遺物	写真図版2
写真13 SB05出土遺物	写真図版2
写真14 SB09出土遺物①	写真図版2
写真15 SB09出土遺物②	写真図版2
写真16 SB10出土遺物	写真図版2
写真17 SB11出土遺物①	写真図版2
写真18 SB11出土遺物②	写真図版2
写真19 SB11出土遺物③	写真図版2
写真20 SB13出土遺物①	写真図版2
写真21 SB13出土遺物②	写真図版2
写真22 SB13出土遺物③	写真図版2
写真23 SB13出土遺物④	写真図版2

第1章 はじめに

神祖遺跡は、静岡県富士宮市小泉字神祖（第1図）にあり、広範囲に広がる丘陵部の多い富士山の傾斜地上に立地する（第2図）。今回の発掘調査では、居住域としての集落跡が発見された。

1. 調査の経緯

発掘調査が実施された原因は、2007年に計画された宅地造成工事に伴うもので、事業者の依頼を受けた富士宮市教育委員会が確認調査を周囲の埋蔵文化財附蔵地として指定されている神祖遺跡において2007年9月25日から10月3日かけて実施した。確認調査の結果、サギ沢川の川岸に広がる旧河道以外の丘陵上で、古墳時代前期を主体とした集落遺跡の良好な残存が確認された。これらの調査成果を踏まえ、開発事業自体の見直しを検討する中で、遺跡の現状保存も考慮した事業計画の提示を受けて、文化財保護法第93条の規定により、発掘調査の実施が決定された。発掘調査は、開発事業者側との調整を経て、恒常に使用される新設の道路部分を主な対象地とし、株式会社東日の測量等における支援を受けながら、富士宮市教育委員会が実施することとなった。

2. 調査の経過

発掘調査は、周辺の住宅に対する安全対策を施し、2008年6月18日（木）の現地休憩所設置から開始した。6月19日（木）より重機による表土排除作業を開始した。発掘調査の対象面積は、 532 m^2 である。表土は耕作土を中心として20cm～30cmほどであったが、随所にかつての土取りのための重機による搅乱が認められ、その掘削などにやや手間取った。

調査の全体の経過は以下の通りである。

6月18日（水）

現地休憩所、安全柵等設置、

6月19日（木）

重機による表土排除作業開始

6月24日（火）～6月30日（月）

遺構の精査作業、遺構覆土排除作業、遺構調査、

7月1日（火）

遺構覆土排除作業、遺構精査、基準杭等設定

7月2日（水）～7月29日（火）

遺構覆土排除作業、遺構調査、遺構掘り方調査、遺構実測

7月30日（木）

遺跡調査全景写真撮影、器材等撤収

8月1日（土）

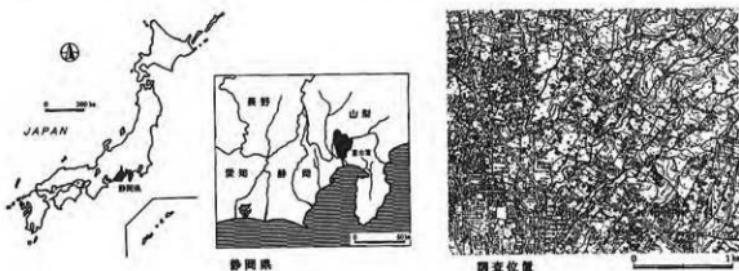
遺構補足調査、現場休憩所等撤収

現地における発掘調査の終了後、富士宮市教育委員会教育文化課文化財整理室において整理作業を実施し、本書の発刊を以って発掘調査全体の作業を終了している。

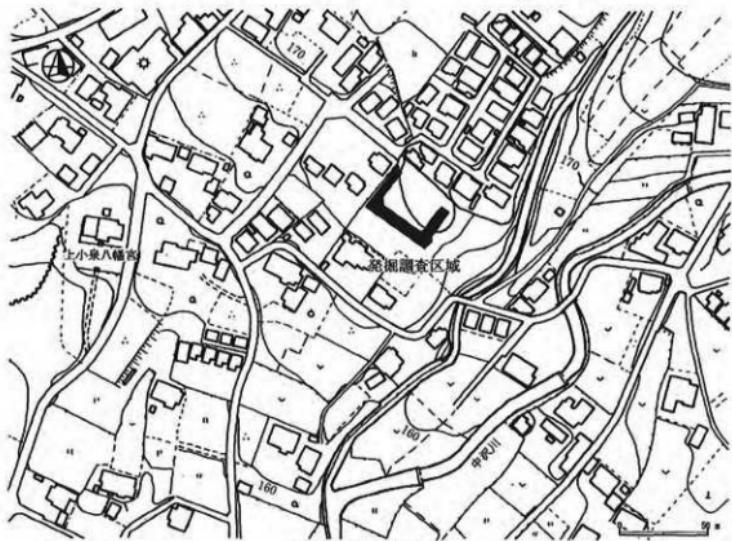
第2章 遺跡の環境

1. 自然環境

神祖遺跡の位置する小泉～大岩地区は、富士火山熔岩流の流出末端部分、現在の富士山の裾部分に当たり、数多くの湧水地の形成が認められる地形環境を示している（第3図）。それは、溶岩流の外側に広がる富士山麓の扇状地内において河川の発達の要因ともなる。扇状地内には、その河川による侵食活動で、富士山からの傾斜地に特徴的な丘陵地形を形成する。安定した丘陵地形、湧水地とそこから派生する河川、このような地形的な環境が遺跡造営の大きな根拠ともなっている。富士山麓に



第1図 富士宮市位置図



第2図 調査位置図

における複雑な地形環境は、直接、遺跡分布に反映されるもので、富士宮市域での偏在するその分布として表れる。遺跡は、その生業が自然環境に大きく依存する段階と富士山信仰が山岳信仰として確立した平安時代後期以降とでは、その分布域を大きく違えるが、前者については、上記の地形環境が大きく作用して、それぞれの遺跡が立地するのである。

富士宮市域は、古富士火山の泥流層を基盤とした独立丘陵となる星山・羽駒丘陵内の河岸段丘上やその丘陵と富士山の傾斜地を分断する富士宮断層伝いに流れる潤井川が作用して形成されたその左岸域を中心とした沖積平野。富士火山の熔岩流を基盤とした富士山塊と今回調査を実施した火山性の扇状地との4つの地形に大きく大別される。現在の富士山の大半は、熔岩流を基盤とした地域に含まれるもので、生活域としては、諸条件の揃わぬい場所であり、遺跡分布の希薄な範囲となっている。

富士宮市内の遺跡は、地形環境に大きく影響されてその分布を示すもので、次の3つの地帯がその中心となる。それは、星山・羽駒丘陵内の河岸段丘上、現在の市街地一帯とほぼその範囲が合致する沖積地内の微高地、小泉周辺の丘陵上となる場所であり、市域の西側～南西側にかけての範囲にいずれも集約されるものとなっている。そして、この地域は、潤井川あるいは富士川と弓沢川を主とする小河川の流域として捉えられるものである。

星山・羽駒丘陵と小泉・大岩周辺地域は、火山噴火による壊滅的な影響を受け難かった地帯として、富士山麓においては比較的安定した自然環境を示している。

神祖遺跡における今回の調査地点は、西側の埋没谷と東側を出水の湧水地を水源とする中沢川が流れることにより丘陵地形とした独立性を醸し出している。また、その南東側には今「上小泉八幡宮」の中に神祖湧水地のひとつがあり、中沢川と共に水資源の確保に供している。

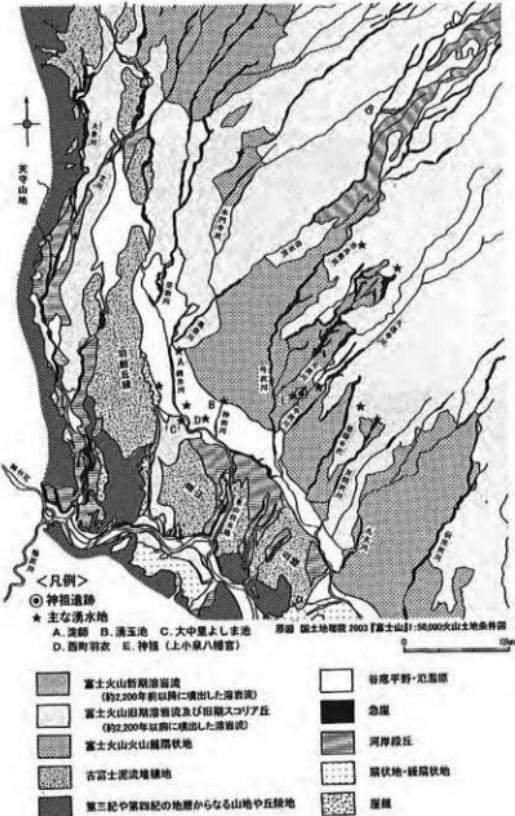
富士山南麓において、遺跡造営の基盤となるのは富士火山を起源とする地質環境が大きく作用するものであるが、その経営期間も火山噴火の影響が大きく、特徴的な分布域を各時代で示すものとなっている。

2. 歴史環境

神祖遺跡(1)の周辺は、古墳時代を中心として比較的遺跡分布の多い地域である(第4図、第1表)。それは、時代的に複合することでも、その数を増やすものである。

今回の調査に関連する歴史的な背景は、弥生時代以降の時代が直接係る。弥生時代後期はその中葉段階に至って、潤井川流域に遺跡の出現が認められるのである。潤井川左岸の沖積地の微高地において環濠集落である泉遺跡が築かれ、環濠の発達を契機として、この中流域に遺跡の広がりが見られるのである。弥生時代後期後半に、星山・羽駒丘陵内の滝戸遺跡、大中里坂下遺跡や月の輪上遺跡、下ヶ谷戸遺跡、富士山側斜面地の神祖遺跡のある小泉地区に石敷遺跡が登場する。それらは、丘陵地への進出であると共に東日本における山間地への進出に同調した動きとして捉えられるものである。

古墳時代前期になると、大きく4箇所の地点を中心とした遺跡の分布域が形成されるようになる。滝戸遺



第3図 富士宮市域地質略図

跡、泉遺跡周辺の潤井川中流域、浅間大社遺跡周辺の神田川流域、月の輪平遺跡、塙本古墳のある星山谷、丸ヶ谷戸遺跡（5）、神祖遺跡のある弓沢川左岸域の地域が取り上げられるわけである。その中で、潤井川中流域と星山谷に隣する地帯は、弥生時代後期後半から継続して集落遺跡の經營が行なわれていた地域として捉えられる。市街地の中心地でその実態のよく分からぬ神田川流域では、浅間大社遺跡の発掘調査で神社関連遺跡以外に古墳時代前期の集落が発見されたり、小型丸底甌や有段口縁鉢など出土しており、丘陵部の微高地上に集落が展開しているものと想定されている。

神祖遺跡のある小泉、大岩地区では、丸ヶ谷戸遺跡の前方後方形周溝墓の登場に象徴されるように古墳時代前期前に新たな地域開発が始まる。今回の発掘調

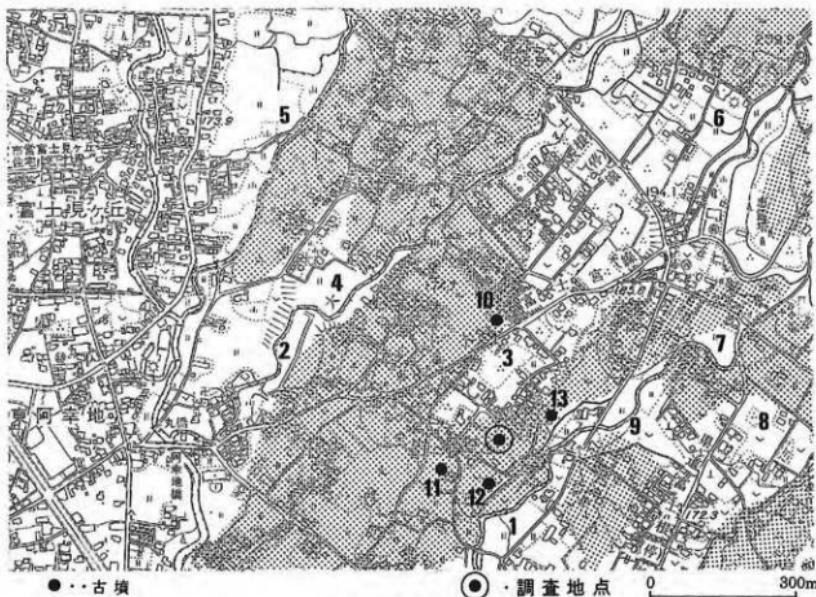
査の成果を評価すれば、この地域において、丸ヶ谷戸遺跡における墓域と神祖遺跡における集落域として捉えられる2つの特徴的な領域の形成が想定されるのである。今回の調査地点から南西へ300mにある三ッ室遺跡（2）における発掘調査では、屋内での中央に棟持柱に係る柱穴が見られる特異な竪穴住居が発見されている。この竪穴住居は、何らかの要因で意図的に埋め戻されている竪穴住居であるが、同様の例が丸ヶ谷戸遺跡においても確認されている。丸ヶ谷戸遺跡例は、方形周溝墓を構築のために意図的に埋め戻された竪穴住居であり、このような埋め戻し行為が墓の葬送儀礼に係るものであれば、三ッ室遺跡にも丸ヶ谷戸遺跡のような墓域の存在が想定されるものとなる。

古墳時代中期は、遺跡の分布が現在の市街地周辺に集中する。この段階の遺跡は、浅間大社遺跡や大宮城跡など神田川の流域にまとまる。また、5世紀の後半になると戸戸古墳群の造営が始まり、潤井川流域における群集墳の登場が知られる。

古墳時代後期は、富士山の西南麓において、2つの古墳群と集落遺跡の分布が認められる。戸戸古墳群から別所古墳群にかけての安山岩地区を中心とした大室古墳（10）や神祖山ノ神古墳（13）などが点在する小泉の地区に2つ

の古墳群があり、それぞれに対応するように、前者に泉遺跡、東田遺跡、浅間大社遺跡、大宮城跡の沖積平野内に展開する遺跡群と後者に木ノ行寺遺跡、中沢遺跡など弓沢川下流域に展開する遺跡群の分布が対応する。このように、古墳時代後期に潤井川流域においては、遺跡の分布が明らかとなり、集落と古墳が登場するのである。潤井川流域では、その下流域において、同時期のものとして沢東A遺跡、中折遺跡、東平遺跡などの出現も明らかとなる。

7世紀の中葉以降は、東平遺跡に象徴されるように、計画的な造営が窺われる集落遺跡の登場が富士市域の平野部において見られるものである。



第4図 周辺遺跡分布図

番号	遺跡名	種別	時代	標高	備考
1	神祖遺跡	墓葬・散在地	縄文(中)・古墳(前)	170	今回調査
2	三ツ室遺跡	墓葬・散在地	古墳(前)	155	樹根
3	大室遺跡	墓葬・散在地	縄文(中・後)・古墳(後)	170	湧水道槽(縄文)
4	麻石通路	墓葬・散在地	縄文(前～後)・奈良	180	
5	丸ヶ谷戸遺跡	墓・墓葬	縄文(中)・古墳(前)・中世	175	前方後方形周塁墓
6	箕輪A遺跡	墓葬	縄文(中・後)	220	
7	出水西遺跡	散在地	古墳(前)	185	
8	出水東遺跡	散在地	縄文(前・中)	185	
9	寺ノ後遺跡	散在地	縄文(中)	170	
10	大室古墳	古墳	古墳(後)	176	市指定
11	神祖2号墳	古墳	古墳(後)	164	
12	神祖3号墳	古墳	古墳(後)	162	
13	神祖山/神谷塚	古墳	古墳(後)	176	

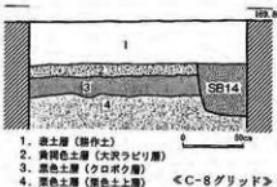
第1表 遺跡一覧表

3. 層序

神祖遺跡における今回の発掘調査地点では、弓沢川左岸域の富士山裾部に広がる丘陵地形上における下記のような標準的な土層の堆積が認められている(第5図)。

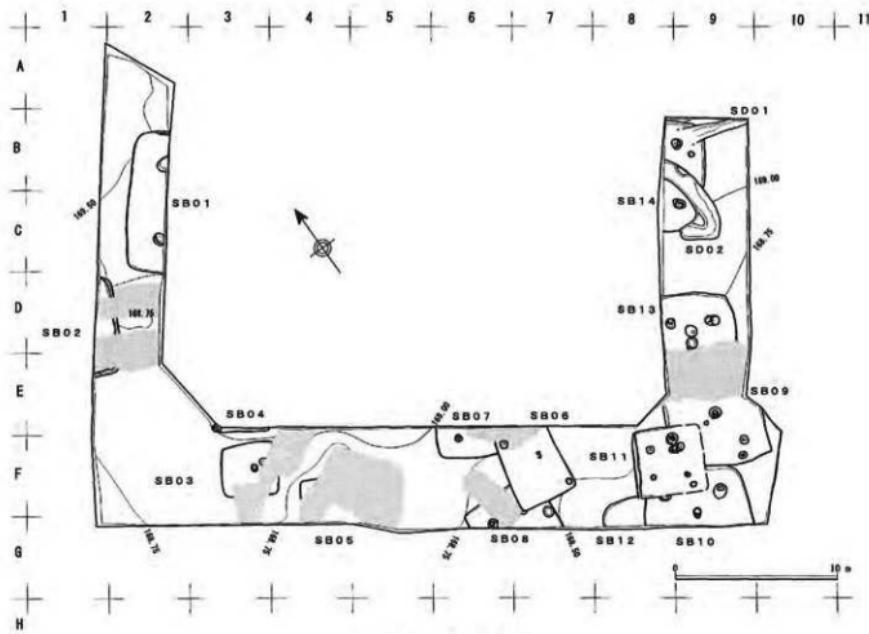
- 第1層 表土層(耕作土他)
- 第2層 黄褐色土層(大沢ラビリ層)
- 第3層 黒色土層(クロボク層)
- 第4層 栗色土層(栗色土上層)

谷地形に移行する部分においては、第1層と第2層の間にしまりが弱く、粒子の細かい黒褐色土の堆積が部分的な広がりとして認められる。



1. 表土層(耕作土)
2. 黄褐色土層(大沢ラビリ層)
3. 黒色土層(クロボク層)
4. 栗色土層(栗色土上層) < C-8 グリッド>

第5図 標準土層図



第6図 遺構全体図

第三章 遺構

発見された遺構は、竪穴住居址14軒、土坑1基、溝状遺構2条などである（第6図）。

I. 竪穴住居址

竪穴住居址は、全て古墳時代前期のもので、その分布も調査区のほぼ全域に亘るが丘陵縁辺部分に集中する傾向にある。

また、丘陵上で構築された竪穴住居の大きな特徴である床下構造（掘り方）が、普遍的に認められ、各種の類型に分けられる（富士宮市教育委員会1981）。

SB01（第7図）

B-2、C-2グリッドで発見された竪穴住居址で、南西部分の2/3程が調査区区域外へ広がる。南西側で、後述する溝状遺構SD01に隣接する硬化面と重複して、覆土中にSD01が構築されている。確認された平面形は、隅丸方形としても、2箇所のコーナー部分が直角に近いカーブを描くもので、各方向の壁が直線

的な形状を示す。北東から南西方向で測る最長部で、873cmを測る大型の竪穴住居である。

壁は、比較的残りが良く、ほぼ垂直に立ち上がり、高さが調査区の壁部分で北東側52cm、南西側30cmを測る。北東壁部分に壁周溝が一部残存する。周溝は、幅16cm、深さ7cmを測る。

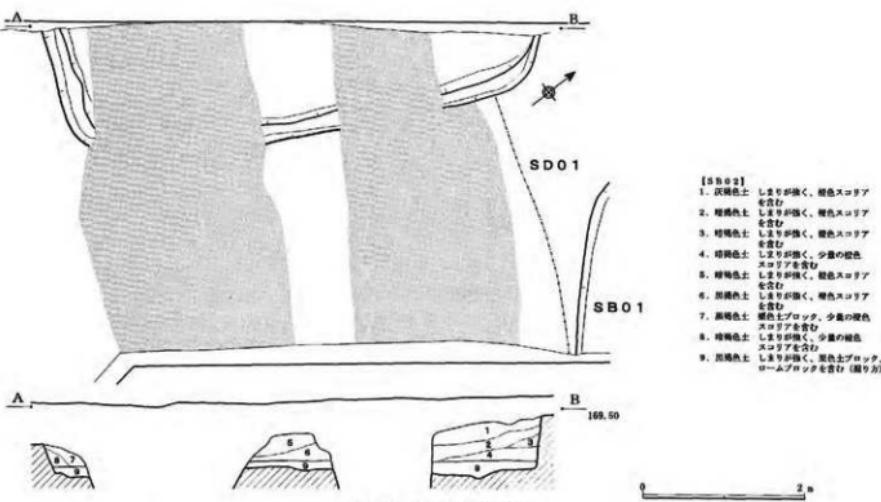
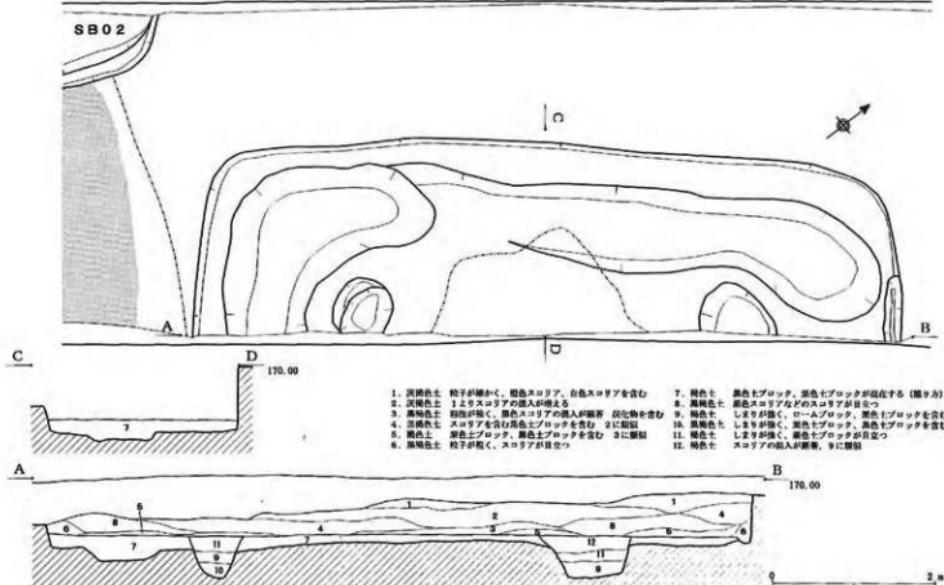
床は、平坦で、住居の中央部分において特に硬化した径2mほどの範囲が確認される。

覆土は、床の直上に意図的に埋め戻されたか、屋根上の土が溜まつたか、黒色土が床面から15cm程度の厚さで堆積している。その上層は、標高を高くする北東側からの流入がやや目立つレンズ状の自然堆積を示す。

柱穴としては、4本柱穴の内、2個の穴が確認された。北東側が径95cm、深さ52cm、南西側が径85cm、深さ52cmを測る。両者は心芯で460cmの間隔を開ける。

掘り方は、竪穴の周囲を掘り進める形態で、幅1mほどの溝が、壁際から20~30cmの間隔を開けて巡る。

遺物は、細かい破片資料も含めてもほとんど出土していない。竪穴中央部の覆土中から花崗岩製の砥石（第17図2）が出土している。



S B 0 2 (第8図)

D-1グリッドを中心に発見された竪穴住居址で、2/3以上が調査区域外に展開していることと、大半が後世の搅乱により破壊されており、その実体はよく分からない。残存するコーナー部分からは、ほぼ方形に近い平面形が想定されるものである。発見されている部分での幅は、598cmを測る。

壁は、北東側での掘り込みが明瞭に残っており、深さ75cmを測る。壁は、床面から30cmの高さまではほぼ垂直に立ち上がり、それ以上が外側に傾斜して、上部の崩落の痕を窺うことができるものとなっている。

覆土は、北東側からの流入がやや目立つレンズ状の自然堆積を示す。

掘り方は、北東端部以外、壁際を最大20cmほど幅で掘り残し、北東側ほど深くして全体を掘り廻めているようだ、最深で25cmを測る。

S B 0 3 (第9図)

F-3グリッドで発見されているやや小型の竪穴住居址で、長方形に近い方形の平面形を示す。352cm×310mの大きさを測り、北西→南東方向にやや長くなる。

掘り込みの深さが浅く、さらに後世の搅乱の影響を受けて残存の状態は悪い。特に、南西壁と南東壁においては、その大半が搅乱によって消失していた。

壁は、残存状態の良い北東側で高さ30cmを測り、ほぼ垂直に立ち上がる。床面は、平坦な貼り床を形成するが、明瞭に硬化している面は確認されていない。

覆土は、規則性のあまりない堆積を示し、水平に堆積する部分も認められている。いずれの堆積土も黒色土のブロックの混入が見られるもので、意図的に埋め

戻されたような様相を示していた。

付属する施設としては、中央部分で炉址が発見されている。炉址は、炉石を伴う地床炉で46cm×39cmの楕円形を示す。焼土の堆積は明瞭で、厚さ8cmを測る。炉石は玄武岩製で長さ21cm、幅8cmを測る断面四角形の平石を使用している。炉址の北東側に径45cm、深さ20cmを測るピットを1個発見しているが、具体的な用途については分からぬ。

掘り方は、全面を掘り廻める形態を示すものであるが、北西側ほど深くなり、南西及び北西コーナー部分は、さらに土坑状に掘り廻めている。

S B 0 4 (第9図)

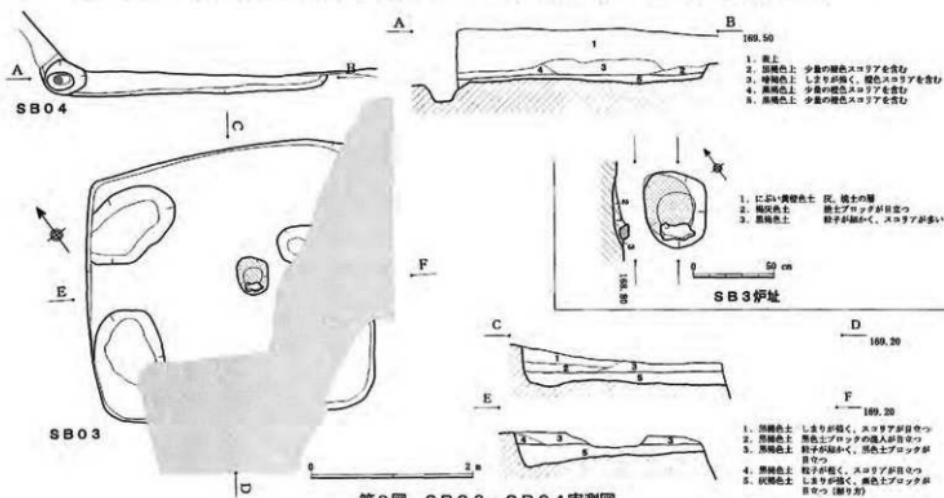
E-3グリッドで発見されている竪穴住居と思われる竪穴の南西壁部分のみが発見されている。直線的な壁部分が高さ18cm、長さ350mを測るやや小型の竪穴で、その南西コーナー部分には1個のピットが発見されている。ピットは、径52cm、深さ35cmで、その底部に円形の硬化面が認められている。硬化面は径12cmで、建物の柱に係ると思われるものである。

掘り方は、調査された部分において、深さ10cmを測って全体を掘り廻めている。

S B 0 5 (第10図)

F-4グリッドで発見された竪穴住居址で、搅乱等の影響が著しく、その掘り込みが、北西コーナー部分で僅かに確認されるのみである。最大でも高さ15cmほどを測るコーナー部分の形状からは、方形の平面形が想定されるものである。

床は平坦で、調査区の南西壁際で長さ265cm、幅200cmの範囲と北西コーナー部分を確認している。



第9図 SB03・SB04実測図

覆土は、炭化材や焼土を含む黒褐色土が床面の直上に堆積しており、その上をしまりのある暗褐色土や黒褐色土が覆う。覆土最下層の状況から火災家屋であったものと思われ、焼土及び炭化材の分布が住居の床面において認められた。

掘り方は、その残存状態から全体の形状が把握できるものではないが、SB02のように竪穴の全域を掘り窓める形態が想定される。

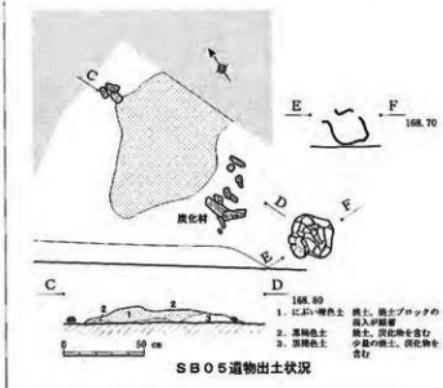
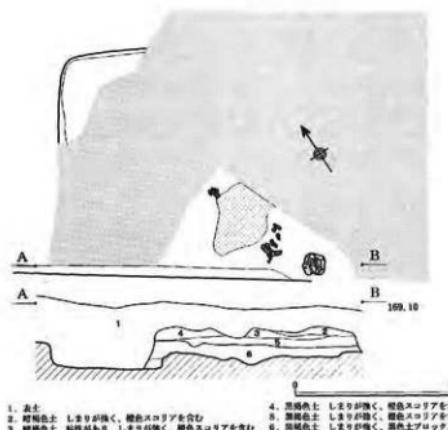
遺物は、炭化物や焼土と共に完形の壺（第17図6）が出土している。この壺は、竪穴住居の中央に向かって横倒しの状態で発見されており、器面が脆くなつて、被加熱の痕跡が見られるものであった。

S B 0 6 (第11図)

E-7、F-6、F-7グリッドで発見されている竪穴住居で、SB07とSB08及びSK01と重複関係にあり、いずれよりも新しくなる。北壁部分が搅乱により消失しているが、470cm×358cmの大きさを有する長方形の平面形を示す。

残存状態が悪く、西壁で10cm程度の高さが確認されるが、その他は床面だけ確認される部分が多く、床面まで後世の削平が進んで、既に消失している部分も認められた。平坦な床面を構築しているものと思われるが、明瞭に硬化している部分は明らかではない。

付属する施設としては、北西コーナーと南東コーナー一部でそれぞれピットを発見している。前者が径50



第10図 SB05実測図

cm、深さ44cm、後者が径38cm、深さ33cmを測る。竪穴のコーナー部分との位置関係から対応するものようで、住居の柱などに係るピットではないかと捉えられるものである。

炉址と思われる焼土の分布は、中央やや東側で出土している。長径65cm程の皿状の落ち込みに焼土の分布が認められる。地床炉と思われ、深さ10cmを測る。

掘り方は、全体を掘り窓める中で、北壁際を長径175cm、深さ12cm、西壁際を短径90cm、深さ12cmで土坑状にさらに掘り上げて、掘り方としている。

遺物は、南壁際でS字窓（第17図8）の脚台部が出土している。また、炉址と対を成すように中央西側に、床面の構築時に設置された作業台等の機能が考えられる玄武岩製の平石が出土している。大きさは、22cm×32cm程を測る。

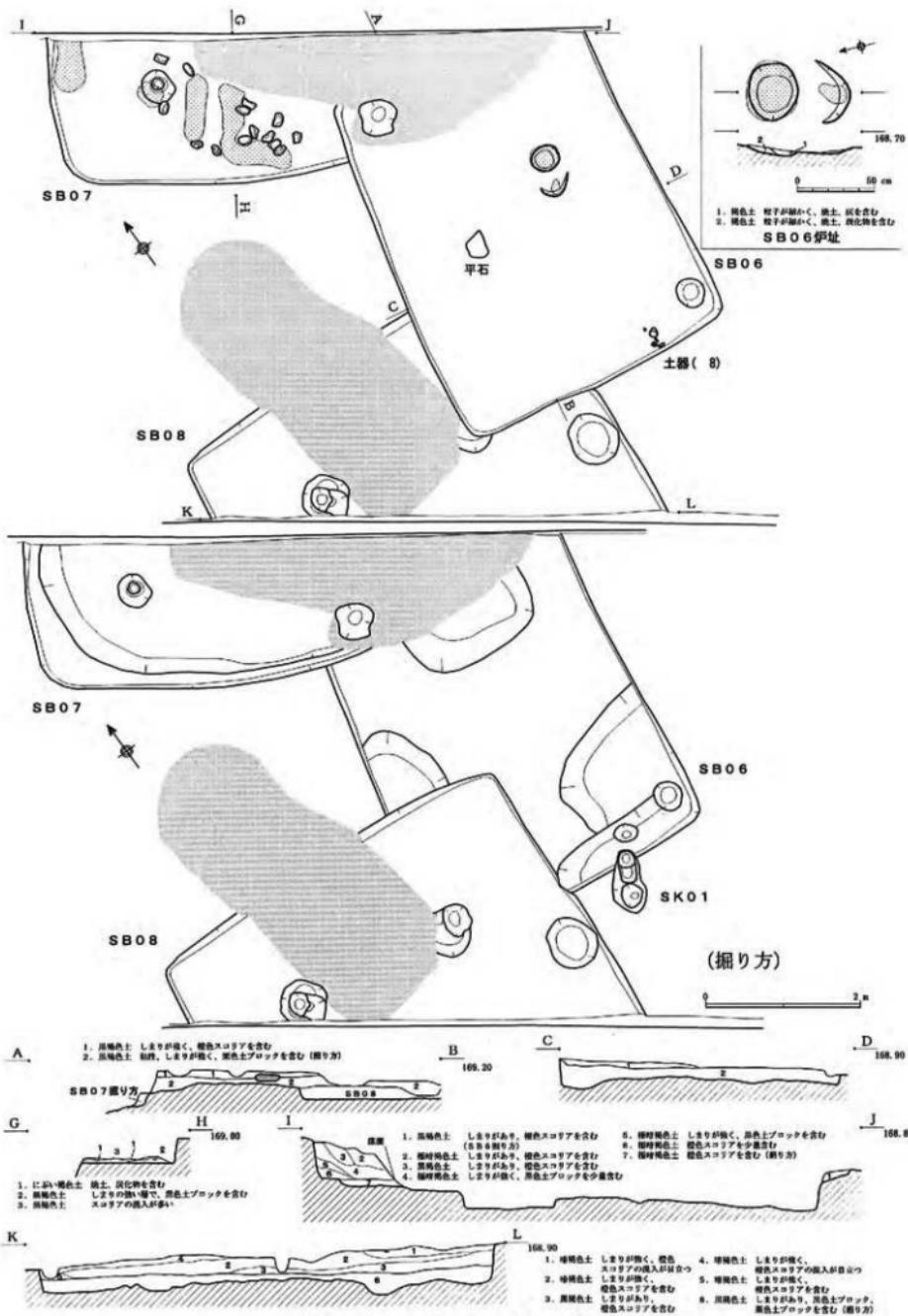
S B 0 7 (第11図)

竪穴住居の南西側がE-6、F-6グリッドにおいて発見されている。搅乱や調査区域外に広がる部分の多いことから全体の様相を分からず、発見されている南西コーナーからは、隅丸方形の平面形を示すものと想定される。壁は、最も残存状態の良い北西壁で、高さ44cmを測り、僅かに外傾しながら立ち上がる。

床面は平坦で、それを構築する掘り方は、壁際以外を残して、全体を掘り窓めるもので、深さ10cmを測る。

付属する施設は、柱穴が1個発見されている。径は40cm、深さ53cmほどで、円形を指向するものである。

遺物については、土器類がほとんど出土していないものの、焼土、炭化物を含むにい褐色土が床面との間に6cm間隔を持つて堆積している。この焼土層に開通して拳大の窓が混入する状態で14個出土して



第11図 SB06・SB07・SB08実測図

いる。長楕円の玄武岩で、中央の括れるものが多く、平均1.2kgの重さを測る。ムシロなどの鰐石（山梨県教育委員会1997）になる可能性があるが、石器として収納を表す出土状態は示していない。堅穴住居の壁や屋根の部材に係るものとのひとつであろうか。

S B O 8 (第11図)

F-6、F-7グリッド周辺で発見された堅穴住居址で、住居の北側2段程度が発見されている。構造の中央部分に大きな擾乱があり、北壁の中央部分が消失している。北壁で49cmの幅を測り、方形の平面形を成す。

壁は、北東側での残存状況が良く、高さ38cmを測り、ほぼ垂直に立ち上がる。

床は、堅穴住居の中央に硬化する面が認められる貼り床で、ほぼ平坦な面が形成される。貼り床を構築する掘り方は、その底面に大小の起伏が認められるもので、堅穴の全体を掘り窪めている。床面からの深さは、28cmを測る。

覆土は壁際で認められる三角堆積以外は、北東側からの流れ込みの目立つ土層が堆積している。

柱穴は、北側の2本の柱に係るもののが発見されている。西側のその掘り方は一辺60cm程の方形に近い平面形で、深さ67cmを測る。東側は、擾乱によって消失している部分が大きいが、幅66cm、深さ54cmを測る方形に近い平面形を推定させる。

S B O 9 (第12図・第13図・第14図)

E-9、F-9グリッド周辺で発見され堅穴住居址でS B 1 0、S B 1 1と重複関係にあり、S B 1 0→S B 0 9→S B 1 1の順で新しくなる。

住居は、その北側が2個の柱穴を含めて擾乱によって消失しており、全体の2/3ほどが残存している。南西コーナーと南東コーナーがほぼ直角に折れ曲がる方形の平面形を示し、東西方向で幅604cmの規模を測る。壁は、北西部で高さ40cmを測り、やや外傾しながら立ち上がる。南東側では高さ16cmで、後世の削平により残存の状態は悪い。床は、堅穴住居址の中央部に硬化した面が認められ、良好な状態で残存していた。

覆土は、壁際で見られる三角堆積以外は人為的な埋め土で黒色土ブロックの混入が顕著な堆積土で占められている。また、堅穴住居の壁周辺に焼土と炭化物の分布が認められ、北西壁際には炭化材の分布も見られた。火災家屋の様相を示しているものと思われるが、炭化物や焼土の分布は比較的少ない。故意に家屋を焼失させ、その跡地としての堅穴を埋め戻しているものと考えられる。

柱穴は、南側の2個が確認されている。西側は、径65cmを測る楕円形で深さ33cmを有する。東側は径52cmでほぼ円形に平面形を示し、深さ39cmを測る。

炉址は、石組み炉の一種と思われる特異な炉で、炉

の掘り方に設置された2個の礫により構築されている。炉床は、厚さ18cmほどを測る三角錐の礫を利用しているが、平坦な底面を床としてうまく利用しており、34cm×25cmの大きさを測るものである。枕石も同様に置かれているもので、幅15cm、長さ35cm、厚さ15cmを測る断面三角形の礫が使用されている。両者とも石質は玄武岩である。明瞭な赤化した焼土の範囲ではないが、この礫の周辺には加熱された痕跡として考えることができる焼土や焼土塊及び炭化物の含まれる黒褐色土の分布が74cm×68cm、深さ5cm程度の範囲で確認される。炉の掘り方は、礫の設置に係るもので、2段に掘り窪めたピットとして確認される。長さが55cm、幅48cmの大きさで、深さが上段で11cm、下段で22cmをそれぞれ測る。炉址に伴う状態で第18図19や21が出土しているが、直接関連するものではない。

南壁際の東側では、貯蔵穴と称されるピットが発見されている。大きさは40cm×53cmを測る楕円形の平面形で、その底部は15cm×24cmの方形の平面形を示しており、本来、方形に掘られたと想像されるものである。深さは78cmを有し、下層にしまりのある黒褐色土が堆積するものの上層はしまりの弱い黒褐色土で構成される。このピットには、第18図16の小型壺が下層の堆積土中から出土し、同じく15の鉢の破片が下層と上層の間に出土している。16はほぼ完形であるが、15は破片でピット外の資料と接合関係を持つ。

掘り方は、堅穴に全面を掘り窪めた形態であるが、東側に壁の際をさらに15cmほどで土坑状に掘り上げて掘り方をしている。

S B 1 0 (第12図・第13図・第14図)

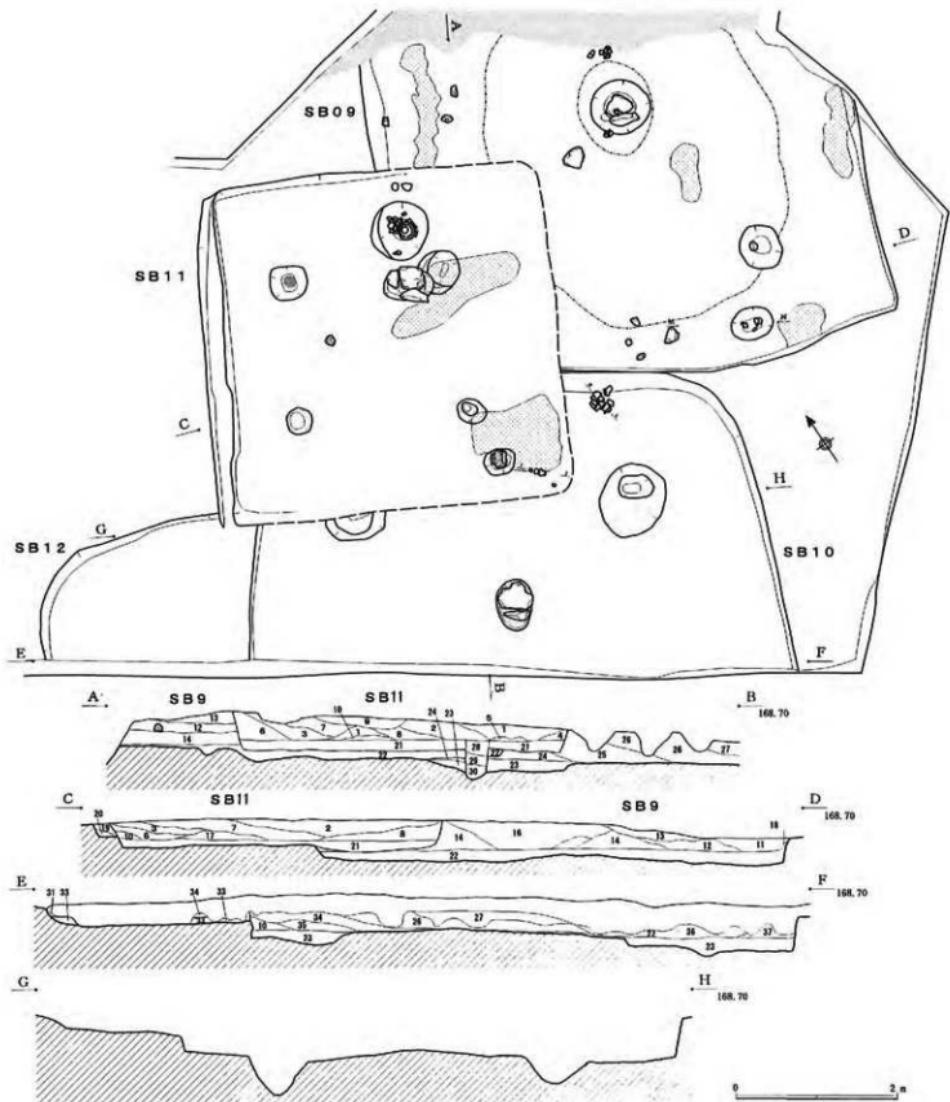
F-8、F-9グリッドで発見された堅穴住居址でS B 0 9、S B 1 0、S B 1 2と重複する関係を示す。新旧はS B 1 2より新しく、それ以外より古くなる。堅穴の半分ほどが調査区域外に展開しており、全体の様相は分からず、北壁に伴う各コーナーの状態では、隅丸方形の平面形で、幅670cmの規模を測るものが想定される。壁は、東壁で高さ25cmを測って垂直に立ち上がるが、後世の擾乱の影響で、残存状態は悪い。

床は、炉の周辺部に硬化した面が認められ、その残りは良い。床に構築に係る掘り方は、中央部分を掘り残す形態で、周囲に幅2m程の溝が巡るものである。

覆土はS B 0 9と類似してその大半が人為的な埋め土で、一気に埋め戻されたような状況を示す。

柱穴は、北側の2個が発見されており、西側が深さ70cmで、73cm×64cmの楕円形の掘り方で、東側が90cm×78cmの楕円形で、深さ63cmを有するものである。

炉址は、S B 0 9と同様に石組み炉で、炉床に平石を設置している。平石は幅31cm、長さ42cm、厚さ8cmを測るものを平らに置くことで床としている。横に置かれている枕石は、幅12cm、長さ33cm、厚さ11cmを測



1. 黒褐色土
2. 黒褐色土
3. 黒褐色土
4. 黒褐色土
5. 黒褐色土
6. 黒褐色土
7. 黒褐色土
8. 黒褐色土
9. 黒褐色土
10. 黒褐色土
11. 黒褐色土
12. 黒褐色土
13. 黒褐色土
14. 黒褐色土
15. 黑褐色土
16. 黑褐色土
17. 黑褐色土
18. 黑褐色土
19. 黑褐色土
20. 黑褐色土
21. 黑褐色土
22. 黑褐色土
23. 黑褐色土
24. 黑褐色土
25. 黑褐色土
26. 黑褐色土
27. 黑褐色土
28. 黑褐色土
29. 黑褐色土
30. 黑褐色土
31. 黑褐色土
32. 黑褐色土
33. 黑褐色土
34. 黑褐色土
35. 黑褐色土
36. 黑褐色土
37. 黑褐色土

- 13と同じ

- 13と同じ
- 13と同じ
- 13と同じ
- 13と同じ
- 13と同じ
- 13と同じ
- 13と同じ
- 13と同じ
- 13と同じ
- 13と同じ
- 13と同じ
- 13と同じ
- 13と同じ
- 13と同じ
- 13と同じ
- 13と同じ
- 13と同じ
- 13と同じ
- 13と同じ
- 13と同じ
- 13と同じ
- 13と同じ
- 13と同じ
- 13と同じ
- 13と同じ
- 13と同じ
- 13と同じ
- 13と同じ
- 13と同じ
- 13と同じ
- 13と同じ
- 13と同じ
- 13と同じ

第12図 SB9・SB10・SB11・SB12実測図①

る断面菱形の礫を使用している。両者とも炉に伴う掘り方を掘り窪めた後に、埋設させる状態で設置されている。石質は玄武岩である。炉石は加熱された痕跡が認められると共に、平石の周辺に被加熱による焼土と灰及び炭化物を少量含む屑が厚さ7cm程を測って堆積している。掘り方は、74cm×52cmの大きさを測る土坑で、炉に伴う礫に合わせて、2段に掘り窪められている。深い部分が14cm、浅い部分が12cmの深さをそれぞれ有する。

遺物は破片資料であるが、北東壁際の床面において台付甕（第18図29）が出土している。

SB11（第12図・第13図・第14図）

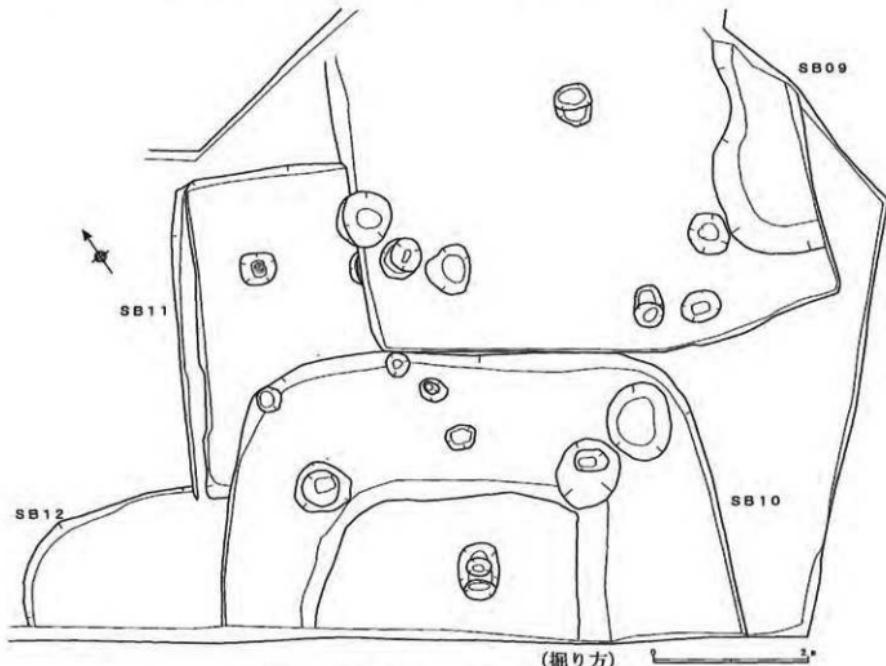
F-8グリッドを中心とした範囲で発見された竪穴住居址で、SB09、SB10、SB12と重複しており、いずれよりも新しい。南東壁と南西壁は、古い段階の竪穴との重複部分にあたり、明確な壁は検出しづらかった。405cm×415cmを測る小型の竪穴住居で、方形の平面形を示したものであると想定される。北西壁部分は、25cm程の幅で2つの直線的な落ち込みが併行しており、建物の改修の跡が窺えるものとなっている。

断面の状況からは、その規模を縮小しているか、あるいは建物の位置を移動させていることが分かる。

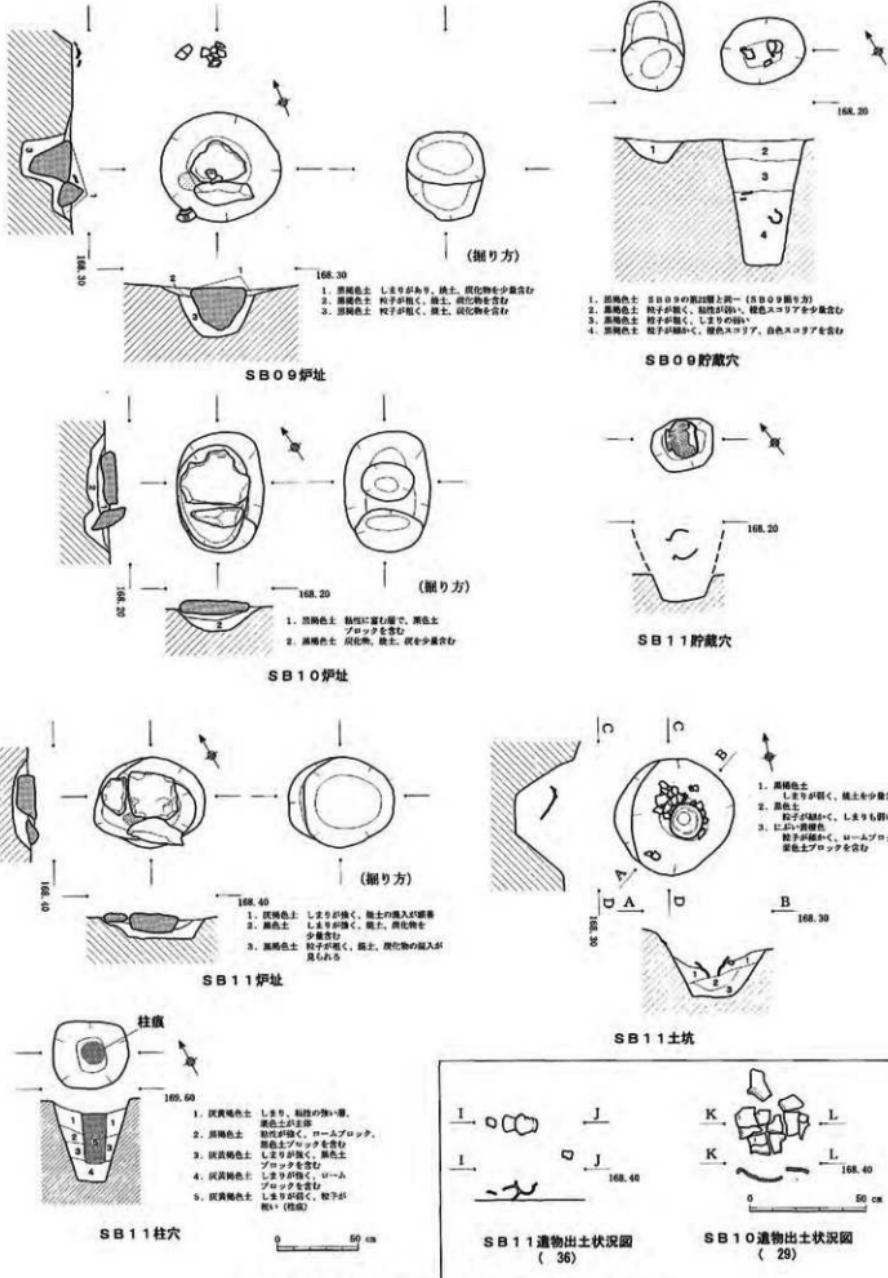
床は、竪穴の全面を掘り窪めた掘り方に貼り床を構築することで平坦な面としている。掘り方は、深さ10～15cmを測る。壁は、やや外傾しながら北西壁で34cmの高さを示す。また、南西壁では、古段階の壁が高さ16cm、新段階が高さ22cmを測る。

覆土は、竪穴住居の南東側半分で頗著な分布を示す炭化物や焼土を含む黒褐色土が床面に堆積しており、火災家屋の可能性が認められるものとなっているが、それ以外は、北側からの流入の目立つレンズ状の自然堆積を示していると言える。

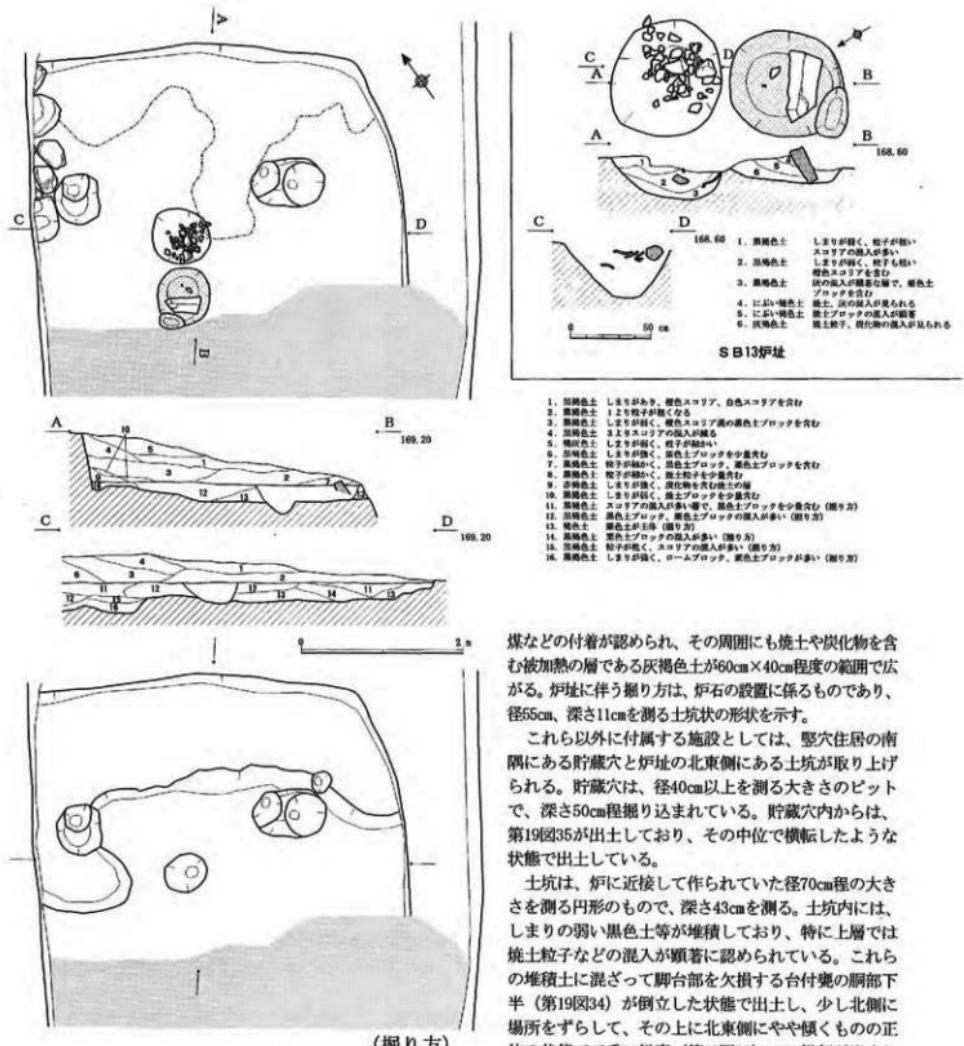
柱穴は、4個発見されている。北側のもの以外他の遺構との重複部分での発見で、正確な形態や規模については分からぬ。北側から46cm×40cmの方形、東側が58cm×50cmの楕円形、南側が径36cmの円形、西側が径32cmを測る円形を示す。この内で、最も残りの良い北側の柱穴では、人為的な埋め土と共に柱痕が土層断面上で確認されている。柱の痕跡は、径14cmを測る円形で、埋め土の最下層を基礎としてその上に柱を設置している状況が確認される（第14図）。



第13図 SB09・SB10・SB11・SB12実測図②



第14図 SB09・SB10・SB11・SB12実測図③



第15図 SB 13 実測図

炉址は、SB 09やSB 10と同様の石組み炉で3個の礫によって構築されている。炉床は2個の平石を並べて平坦な面を形成させている。平石は玄武岩製で30cm×30cm、厚さ11cmと18cm×15cm、厚さ5cmを測るものを使用している。枕石は長さ35cm、幅12cm、厚さ7cmを測る断面三角形の玄武岩製の礫を使う。外側を向かせる面は、人為的な剥離面を形成させている。礫はすべて加熱され、痕跡として

1. 黒褐色土 しまりがあり、粒子が細い
2. 黑褐色土 1より粒子が粗く、しまりが弱く、粒子が粗い
3. 黑褐色土 1より粒子が粗く、コリニア層の黑色土ブロックを含む
4. 黑褐色土 3よりスコリアの混入が減る
5. 黑褐色土 しまりが弱く、粒子が粗い
6. 黑褐色土 しまりが弱く、白色土ブロックを含む
7. 黑褐色土 しまりが弱く、白色土ブロックを含む
8. 黑褐色土 粒子が細かく、土粒子を多少含む
9. 黑褐色土 しまりが弱く、炭化物を含む土層
10. 黑褐色土 しまりが弱く、白色土ブロックを含む
11. 黑褐色土 1より粒子が粗く、しまりが弱く、白色土ブロックを含む
12. 黑褐色土 ブロック状
13. 黑褐色土 黒色土ブロック、黑色土ブロックの混入が多い(掘り方)
14. 黑褐色土 黒色土ブロックの混入が多い(掘り方)
15. 黑褐色土 黒色土ブロックの混入が多い(掘り方)
16. 黑褐色土 しまりが弱く、ロームブロック、黑色土ブロックが多い(掘り方)

煤などの付着が認められ、その周間にも焼土や炭化物を含む被加熱の層である灰褐色土が60cm×40cm程度の範囲で広がる。炉址に伴う掘り方は、炉石の設置に係るものであり、径50cm、深さ11cmを測る土坑状の形状を示す。

これら以外に付属する施設としては、堅穴住居の南隅にある貯蔵穴と炉址の北東側にある土坑が取り上げられる。貯蔵穴は、径40cm以上を測る大きさのピットで、深さ50cm程掘り込まれている。貯蔵穴内からは、第19図35が出土しており、その中位で横転したような状態で出土している。

土坑は、炉に近接して作っていた径70cm程の大きさを測る円形のもので、深さ43cmを測る。土坑内には、しまりの弱い黒褐色土等が堆積しており、特に上層では焼土粒子などの混入が顕著に認められている。これらの堆積土に混ざって脚台部を欠損する台付窓の胴部下半(第19図34)が倒立した状態で出土し、少し北側に場所をずらして、その上に北東側にやや傾くものの正位の状態で二重口縁窓(第19図33)の口縁部が出土している。台付窓の破片資料は、埋没後の諸環境の影響であろうか、破碎化した状態で発見されている。

小型短頸鉢の36は、調査後に出土場所が南東コーナー一部分であることが明らかになったが、焼土と共に床面で発見されたものである。

S B 1 2 (第12図・第13図・第14図)

F-8グリッドを中心として発見されている堅穴住居で、SB 10、SB 11と重複関係にあり、いずれより

も古くなる。煙の歟等の搅乱により、その残存状況は悪い。北西のコーナー部分が発見されており、その平面形は隅丸方形を呈するようで、コーナーが緩やかな曲線を描く。壁は13cmほどの高さを測り、浅く緩やかに立ち上がりを示す。貼り床の面まで搅乱が及んでおり、床面もその残りが悪い。掘り方は、8~10cm程度の掘り込みが認められ、全域を掘り窪めているようである。

S B 1 3 (第15図)

D-9グリッドで発見された整穴住居址で、南西側が搅乱で消失し、北西側が調査区域外へ展開する。発見されている北東コーナーの形状からは、隅丸方形の平面形が想定されるもので、検出されている部分で、456cm×343cmの大きさを測る。

床は、平坦な面を形成して構築されているが、それに係る掘り方は、しっかりと掘り込みの見られるもので、北東壁際幅60cm~80cmの範囲が10cm程度であるのに対して、柱穴の周辺から南西部分では、20cm程度となり、その深さが増す。さらに調査区の北西壁辺りでは、深さ35cmを測り、土坑状の落ち込みを示す。このように、掘り込みが顕著なため、その埋め土も明瞭に分層され、6層に分けられた。壁は、最も残存状態の良い北東壁部分で高さ60cmを測り、緩やかに外傾する。

覆土は、北東壁の周辺で確認されている赤化した焼土層と焼土を含む黒褐色土の分布が床面において認められる以外は、自然堆積の様相を示している。

柱穴は北側の2個が発見されている。北西側は60cm×52cmを測る方形基調のピットで、深さ78cmを測る。北東側も方形を指向しているものであろう。90cm×58cmの大きさを測り、深さ58cmを有する。

炉址は、径65cm~70cmを測る円形の平面形で、深さ15cmを測る。炉内の焼土の堆積は比較的多く、よく使用されていいくものと思われる状況を示す。焼土内には炉石と思われる玄武岩製の切り石が北東側(前方)に向かって倒れ掛かるような状態で出土している。本来は、もう少し南西側(手前)に設置されていたものと思われるが、炉址の南西側に見られる長さ32cm、幅15cm、深さ10cmを測る小さなピットがそれに係る可能性がある。

S B 1 1 と同様に炉址と隣接して土坑が発見されている。円形の土坑で、径70cm、深さ35cmの大きさを測る。土坑の覆土は3つに分層され、灰の混入の顕著な黒褐色土が最下部に堆積する。それ以上の2層は、しまりの弱い黒褐色土であるが、この2層中には、破片化した台付壺(第20図41)と壺の上半部破片(第20図42)が挙大の礫と共に混在する状況で出土している。

S B 1 4 (第16図)

B-9、C-9グリッド周辺を中心と展開する堅穴住居址で、全体の1/3程が発見されている。S D - 0 1 と S D - 0 2 と重複関係にあり、いずれよりも古く

なる。各コーナー部分が重複箇所となるため、平面形などよく分からぬが、残存する直線的な壁の形状から、方形あるいは隅丸方形の平面形が想定されるものである。その規模は、幅685cmを測る。

床は、平坦な面を形成しているが、明瞭に硬化する部分ははっきりしない。貼り床に伴う掘り方は、堅穴の中央を浅くして、その周囲を溝状に掘り窪めるもので、溝部分で深さ20cmを測る。北東コーナーから北東壁にかけては、その壁際を12cmほどの幅で、掘り残す。壁は、高さ28cmを測って緩やかに外傾しながら立ち上がる。

覆土は、壁際の三角堆積を含めて、レンズ状の自然堆積を示している。

柱穴は、堅穴の北東側の2個が発見されている。南東側の柱穴は、85cm×53cmを測る方形の平面形を示すもので、三段に掘り窪められ、深さ70cmを測る。北東側は、径62cmを測る不正円形で、同様に三段に掘り窪め、深さ64cmを測る。

2. 溝状構造

S D 0 1 (第8図、第16図)

その方向性を同じくするD-2グリッド発見の硬化面とB-8及びB-9グリッドで発見されている溝を伴う硬化面を、30m以上の間隔が開くものの同一の遺構としてSD 0 1とする。

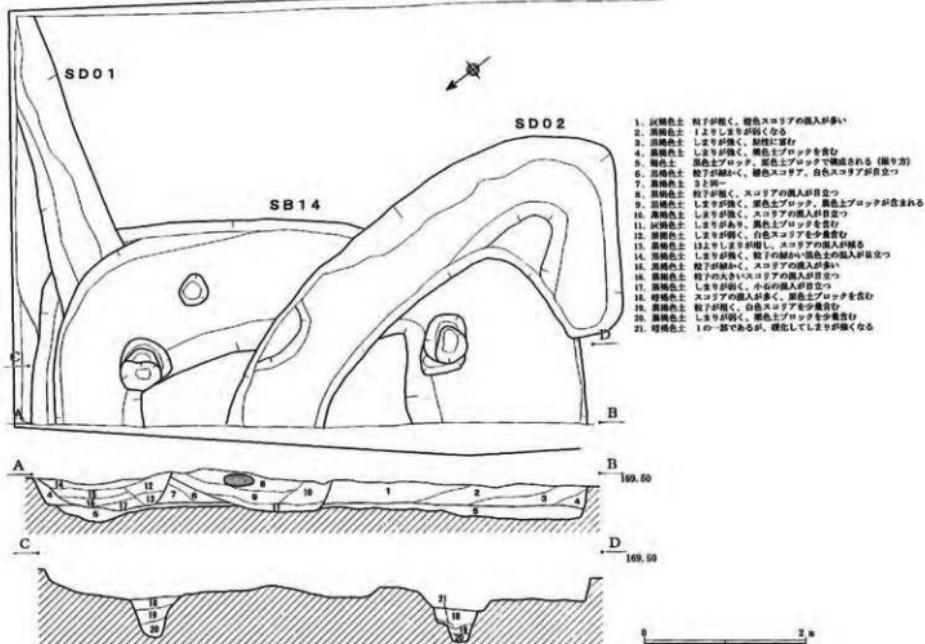
D-2グリッドでは、搅乱によって大半が消失しているものの、東西方向へ延びる硬化面が発見されている。西側のS B 0 1と重複する部分で幅120cmを測り、南側に向かって船底状に緩やか傾斜する面に沿った硬化面として確認されている。

S D 0 1 は丘陵の崖部分の源頭部に近いB列のグリッドにおいては、その特徴が明らかとなる。ここでは、S B 1 4 や後述するSD 0 2 と重複するが、いずれより新しくなる。幅170cm、深さ37cmを測る船底状の溝状遺構として認識される。溝中に埋められた黒褐色土は、4つに分層されるものであるが、最下層以外、各層の上面に硬化面が構築されている。さらに上から2番目の硬化面に対しては、南側に幅60cm、深さ40cmの側溝のような溝が敷設されている。これは、標高を減じるその東側において最上層における硬化面が削平され、消失し、溝持ちの硬化面の広がりが明らかとなる。東側は、複数の面が消え一面だけの硬化面とそれに伴う溝との組み合わせだけになり、地形に沿って、標高を減じる。SD 0 1 は、東西に連続する硬化面で、道状の遺構としての性格が考えられる。

遺物などの出土は認められないが、遺構の切れ合いや覆土の状態などから近世以降の年代が考えられる。

S D 0 2 (第16図)

B-9グリッド、C-9グリッドを中心に、S B 1 4 と重複して発見されている。北西側から緩やかに曲



第16図 SB14・SD01・SD02実測図

がりながら南東側へ展開するがその端部を大きく鉤の手に曲げることで、溝自体を収束させている。溝の幅は、調査区の北西壁部分で、幅3m以上を測り、深さも45cm程度を示す。溝の内側における壁が、比較的急な立ち上がりを示すのに対して外側は緩やかな傾斜を示している。溝の底面は、内側の壁際に最深部を測り、南側ほど地形に合わせて標高を徐々に減ずる。

溝が描く円の南側に開口部を形成することから、そこを箇道部とする横穴式石室が主体部となる古墳に係る周溝となる可能性が指摘される。周辺の削平が進んで、墳丘や主体部がすでに消失してしまった後の姿を表していると想定されるのである。溝中で発見されている人頭大の礫や近接するSB13の表土中から出土している人頭大ほどの大きい礫の固まり、更に表土中などの須恵器の発見（第21図57、58）などはその可能性を表している。第II章の記述のように、今回の調査地点は、古墳の分布域の一角にあたる場所である。

3. 土 坑

調査区域における攪乱が著しく、小規模な遺構の残存は難しい。また、掘立柱建物跡を構成する柱穴になるようなピット列等の発見もない。

SK01 (第11図)

SB06の南壁で複数して発見されている土坑をSK01とする。不整形で長軸136cm、短軸44cmを測る。深さは42cmを測るが、底面における起伏が著しく2つ以上のピットの組み合わせのようにも見られるものである。

覆土は、黒色土ブロックや栗色土ブロックの混入がやや顕著で、通常の自然堆積の状況を示さない。遺物は、明らかにSK01に伴うと思われるものは発見されていない。SB06よりも古い段階のものとなるこの土坑は、木根などにより形成された自然の落ち込みではないかと思われる。

第四章 遺 物

1. 遺構出土

SB01 (第17図)

大型の竪穴住居であるSB01からは、ほとんど遺物の出土を見ていません。1は、蓋の様の小さな底部破片で、弥生時代後期の壺にはその系譜が通れないものである。底部を厚くし、突出させる。2は竪穴の覆土中に発見された砾石で、全体の1/2ほどが残存している。側面は各面とも磨り減っており、よく使い込まれている。

S B 0 2 (第17図)

3は、在地型のS字壺の口縁部破片で肩部外面のヨコハケメが見られ、口唇部内面に弱い面を形成する。4は鉢の破片で、その頸部をやや肥厚させ、緩やかに外反させる。口唇部は明瞭に面取りしている。5は、伝統的な弥生時代以来の台付壺の脚台部破片である。

S B 0 5 (第17図)

6は、短頸で頸部に屈折が見られる単純口縁壺で、不明瞭で小さな平底から大きく外反する胴部下半を経て、最大径を測る胴部中位に至る。胴部の上半は、下半部とは大きく形状を違えて、球形に近い肩部を形成する。外面～口縁部内面には赤彩が施されている。今回の発掘調査では、唯一の完形土器であるが、その形態は非常に特異なものである。周辺における類例の発見例はない。駄士などからは在地で製作されたものと思われるが、在来系土器にはない型式である。

7は、在地型S字壺の脚台部破片である。外面のナナメハケメが認められる。

S B 0 6 (第17図)

8は在地型のS字壺の脚台部破片である。外面のナナメハケメが認められる。9は内外面を丁寧にヘラミガキしている鉢の体部破片である。底部の器厚が比較的薄いのが特徴的である。口縁部は、緩やかに外反し、その口唇部を丸くする。

10は、小破片ながら大崩式の折り返し口縁壺と呼ばれる特徴的な壺の口縁部破片である。口縁内面に端末結節文を含む繩文が施文される。

S B 0 8 (第17図・第21図)

12は直立気味で、緩やかに外反する口縁部がヨコナデで仕上げられ、その口唇部を丸くする鉢である。

13は高坏の脚部破片で、内面のヘラケズリが見られる。小破片の14は、S字壺を原型としながら外面をヘラケズリで仕上げている小型短頸鉢の一種で、特異な事例である。口縁部から肩部外面のヨコナデも特徴的である。なお、これは、その出土位置からS B 0 6 のものである可能性がある。

S B 0 9 (第18図・第21図)

15は胴部の内外面にヨコミガキが見られる鉢、16は粗製の小型鉢である。17や18は、16よりさらに小さくなる粗製の鉢あるいは壺とすべきものである。両者との口縁部をヨコナデする。

19と20は同一個体と思われる高坏の破片である。19は口唇部を全周する沈線が見られ、内外面を丁寧にタテミガキで仕上げている。20は高坏の脚部破片で、坏部下位の坏部接合部以上を欠損する。

21は、複合口縁壺の口縁部破片であり、複合部に5

本をひとつの単位とする縦位の沈線文が施される。頸部の屈折も比較的明瞭で、張りのある肩部が形成されている。壺としては、赤彩の見られる単純口縁の22や本来葬送の儀礼に係るものと捉えられる底部が穿孔されている24などが出土している。

25～27は、S字壺の脚部破片で、搬入品と思われる25と在地産の26、27に分けられる。すべて外面のナナメハケメが認められる。26は、小振りのS字壺の脚部であろうか。

51は口縁部をヨコナデする壺の破片、52がヒサゴの口縁部破片であり、拓影図として掲載した。52の口縁部外面には、細かい条線による横線文と連弧文の構成を示すものと思われる刺突文を見ることができる。

S B 1 0 (第18図・第21図)

28は弥生時代からの伝統的な台付壺の口縁部破片であるが、外面のハケメの施し方が粗雑で、胴部におけるヨコハケメが認められない点や口縁部内面のヨコナデなどその系譜の中では追い難い型式的な要素が加わっているものである。29はその類例を知らない特異な型式の台付壺である。頸部の明瞭な屈折や口縁部内面における平坦面の形成、外面の肥厚、口唇部の面取りや脚台の端部内面の面取りなどの他に、全体を粗いハケメで仕上げている点やそのハケメが口縁部外面の横方向、胴部で縱方向である点など、通常、見慣れない型式的な要素を占められている。その煤の明瞭な付着から煮沸土器として使用されていたものである。

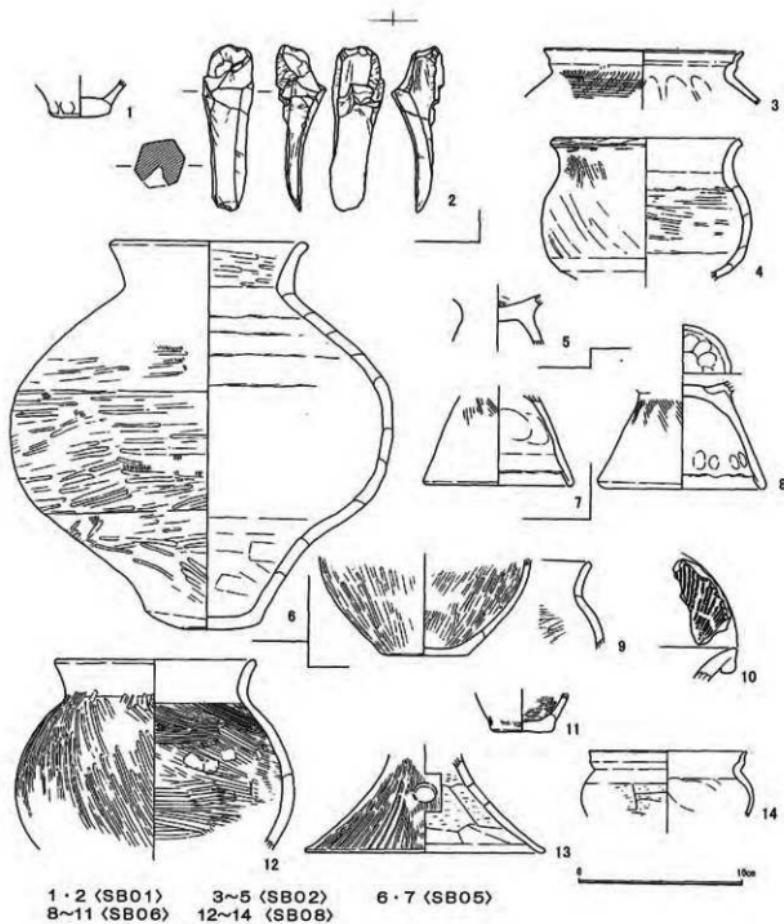
30は碗型の坏部の付される小型高坏である。口唇部の沈線と丁寧に施されたヘラミガキが認められる。31は高坏の脚部であり、裾部分が大きく「八」の字状に開くものである。

32は、小破片のためその形式がよく分からぬもので、あり、壺の口縁部になる可能性もあるものである。端部と途中の段階に刺突文が施される。また、その内面はわずかに端部を肥厚させ、一部に赤彩を残している。

53は口唇部に刺突文が施される壺の破片で、外面に煤の付着の顕著な事例である。54はS字壺B類を模倣している壺の胴部破片で、頸部内面にヨコハケメが施されている。焼成は、あまり良くない在地産の製品である。

S B 1 1 (第19図)

33は二重口縁壺の口縁部のみの発見で、頸部で比較的丁寧に胴部と切り離されており、二次的な転用土器の様相を示す。口縁のみであるが、内外面とも表面の剥離が目立つと共に外面に煤の付着が認められる。この土坑が炉址に近接することを考えると炉で使用された支脚ではないかと思われる。古墳時代前期に大崩式の大型壺口縁が転用されるが（岩本2000）、それと同じ機能を考えてよいものである。34も炉に関連するものであろう。外面をナデ整形で仕上げている特異な台付壺であり、

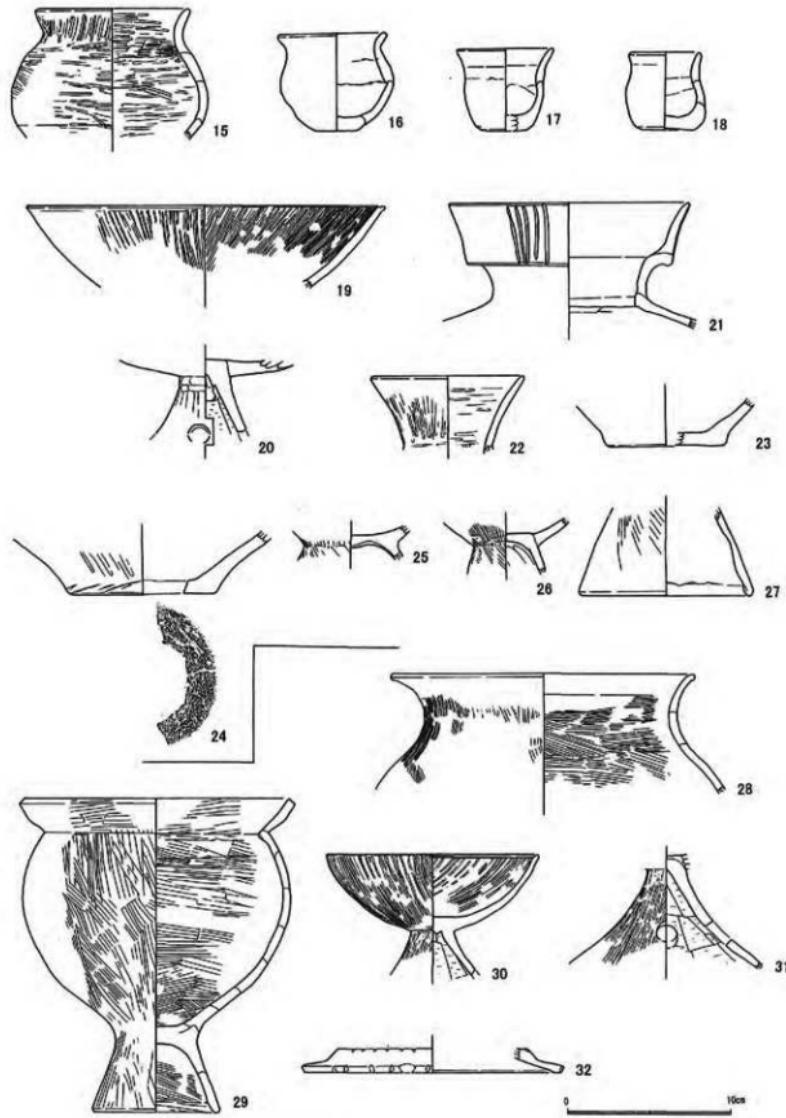


第17図 出土遺物実測図①

煤の付着が顕著で、二次的に過熱されたように劣化している。

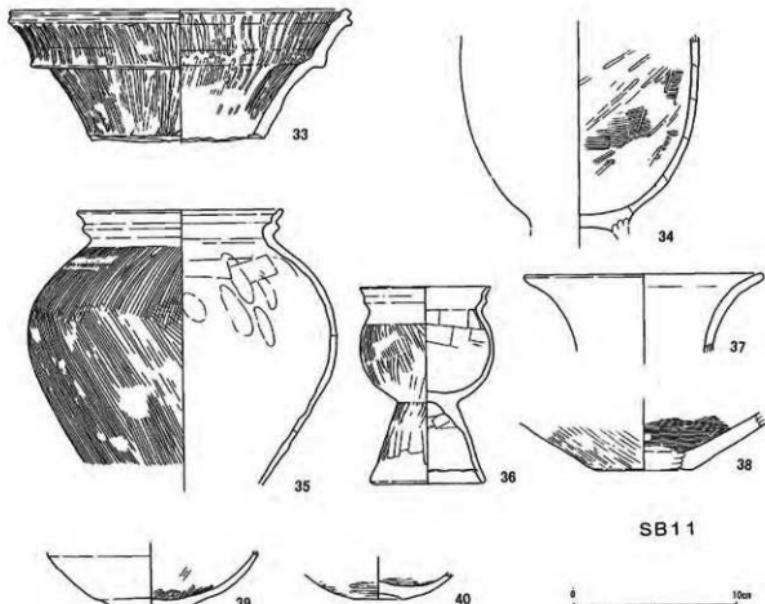
35と36は、S字窯に関連した諸例である。一般的な大きさの35と小型短頸鉢（川村1993）としての36に分けられ、多彩な状況を示している。35は貯蔵穴とされるピット内からの出土で、台付壺の下半部を欠損する。このS字窯は、頸部外面から口縁部内面までのヨコナデが顕著に認められ、肩部内面が板状工具によりナデ整形されている。36も同様の調整が確認されるものである。さらに、脚台部においても外面の板ナデが見られる。但し、胴部のハケメや脚台部のナナメハケ

メは、通常と違えており、明瞭には施されていない。尚、これは、外面に煤の付着が認められるもので、日常的な煮沸の道具とまでは言えないものの火を受けていた痕跡が認められる。39は内面にヘラミガキが認められる平底鉢の体部破片で、口縁部に移行する頸部の屈折部分以上を欠損する。加熱されたと思われるもので、外面の剥離と煤の付着が確認される。40は壺の底部破片であろうか。凹底が特徴的であり、その内面にヘラミガキの痕跡が認められる。



15~27 (SB09) 28~32 (SB10)

第18図 出土遺物実測図②



第19図 出土遺物実測図③

S B 1 3 (第20図)

41は、外縁を縦方向のハケメで仕上げる特異な台付甕で、その脚台部を通常より大きく作る。脚台部は、上半を直線気味に垂下させ、下半を外方へ広げている。胴部との接合部分の径を大きく作るよう意識した形態を示しているものである。この台付甕は、胴部の底部を意図的に打ち砕いて、穿孔させている異質なものである。

42は頸部に弱い屈折の認められる複合口縁壺で、幅広の複合部に刺突による沈線を8本1組として継ぎ位の沈線文として施文する。

43、44は小型壺の破片資料である。43は内傾させる胴部上半に、緩やかに外反する口縁を付し、その口唇部を面取りする。44は小型壺の底部破片で、ドーナツ状に回りを高くする底部の窪み部分にハケメが確認される。

45はやや大降りの台付甕の脚台部の破片である。外面にやや粗くハケメが施される。

在地型のS字甕である。

2. 遺構外出土

遺構外の遺物を第20図と第21図に掲載した。47、48は折り返し口縁壺で上下に幅を持たせる折り返し部が付される。47は口縁部内面に縄文が施文され、文様内に3個で一对になると思われる小さな穴が内側から穿たれている。48は折り返し部分をやや幅広に作り、上端に面を形成する。49はS字甕の脚台部で、胴部外面にヘラケズリ→タテハケメ、脚台部のナナメハケメなどが認められる在地型のS字甕である。55は横線文と波状文が肩部に見られ、56は口縁部内面及び肩部外面に縄文が施文される例である。

57~63は直接遺構の発見の無かった時代の遺物である。57、58は須恵器の甕の小破片、59~62は縄文土器、63は黒曜石製の石鎌である。

S B 1 4 (第20図)

46は、S字甕の口縁部破片で、口唇部内面を窪ませ、浅い沈線状にして、頸部外面をヨコナデで仕上げてい

第V章　まとめ

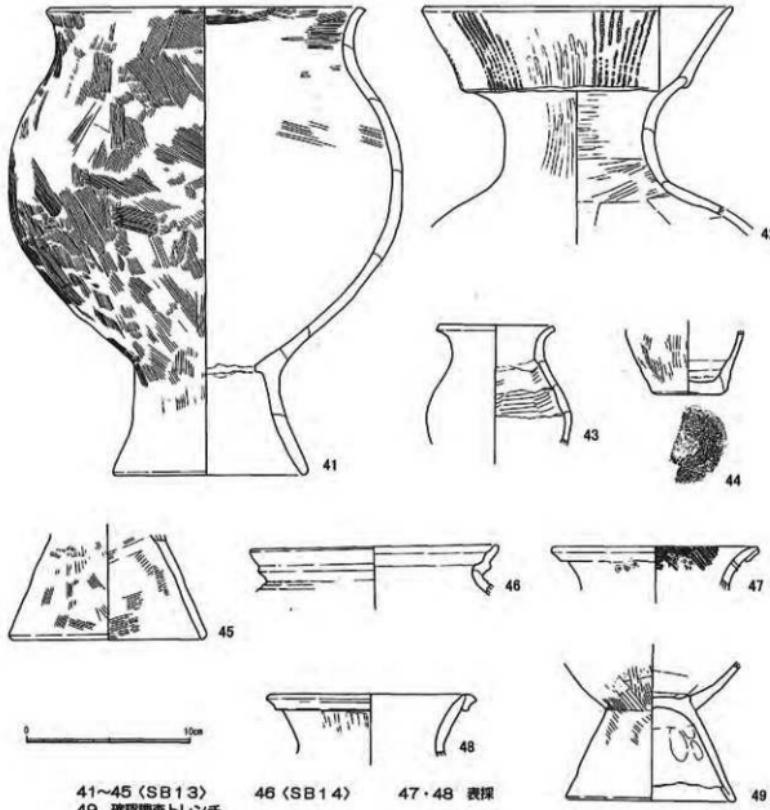
1. 遺跡の年代

出土遺物が一定の数量認められる遺構の内、最も古い段階の土器群としては、SB10からの出土品が当たられる。小型高杯がある中で、頸部の屈折の弱い第18図28などを含むことから古墳時代前期前半の中で捉えられる。在地のものとは大きく系譜を遡る29の台付壺は、時代的な評価を考える上で重要な資料であるが、その実態はよく分からぬ。口唇部内面に弦線の巡る小型高杯や壺の型式などから、これらを大席I式期のものと捉えておく。

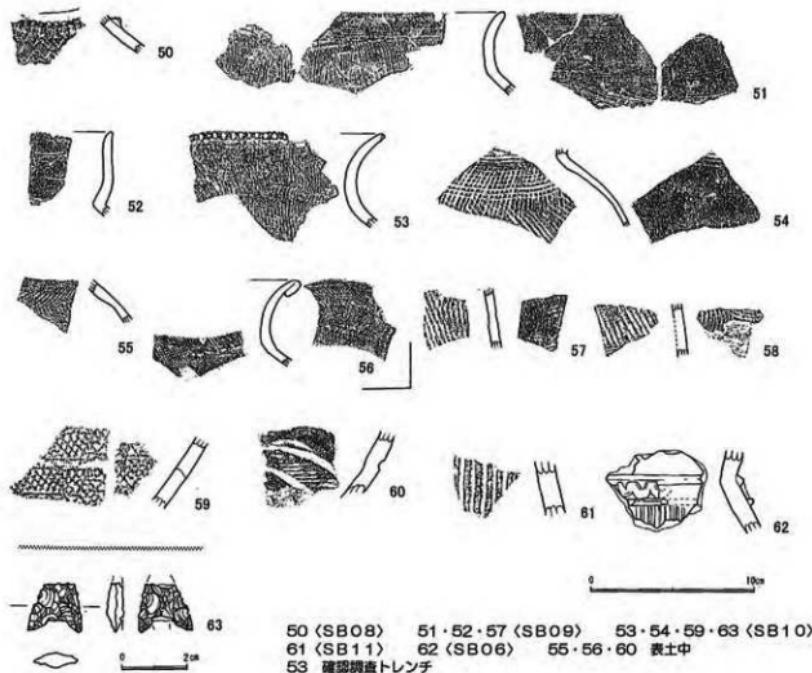
SB13から出土している一群は、小型壺と複合口

縁壺、さらに特異な台付壺で構成されるが、複合口縁壺に関しては、頸部に弱い屈折の登場する時期のものとして捉えられる型式である。小型壺を含む構成なども踏まえると、大席II式期の段階が想定される。

SB09からは同じ複合口縁壺の口縁部（第18図の21）が発見されているが、それは、頸部の屈折がはっきりした二重口縁壺との関連が窺えるようになるものである。明らかにSB13例よりは後出の型式である。大席III式期に比定されるが、粗製の小型壺や底部穿孔の壺底部破片など墓制も含めた祭祀儀礼に係る土器群の一面を示すものである。尚、この段階から在地型のS字壺が普遍化しており、一定の数量を含むことが指摘される。



第20図 出土土器実測図④



第21図 出土土器実測図⑤

今回の調査で典型的な在地型S字壺が出土しているSB11では、二重口縁壺と小型短頸鉢、皿状の体部を作る鉢、特異なナデ整形の台付壺などの出土をしている。二重口縁壺は「伊勢型二重口縁壺」(新名2000)と呼ばれる型式である。鉢は、口縁部を欠損するが、口縁が大きく体部の径を凌駕すると思われるものである。これらの型式組成からSB11を大廟IV式期の段階であるものと捉えられるのである。

ナデ整形の台付壺は、当地域においてその系譜を辿りことができないし、出土事例も報告されていない。周辺地域においても一般的なものではない。S字壺の淵源地である伊勢湾沿岸地域の塔の越遺跡SX01では、長胴となる台付壺で、ハケメ形等ではないものが出土している(愛知県埋蔵文化財センター1990)。しかし、その地域においても普遍性には乏しい型式である。段階の設定としては、大きく細部が生じるものではないが、その出現についてはよく分からぬ。

このように今回発見された集落跡は、その出土土器より大廟I式期～大廟IV式期までを網羅する段階のあることが指摘されるのである。

2. 集落の変遷

集落は、SB10とSB12とが重複関係を持つことから弥生時代までその出現が遡る可能性があるが、出土土器の中で明らかにその段階まで遡るのは出土土器の中から抽出されない。今回の調査成果からは、古墳時代前期の集落遺跡として捉えることとする。

大廟I式期～大廟II式期の古墳時代前期半の堅穴住居は、それぞれ出土遺物が少なく限定的な段階の設定はできない。2時期として時間的な幅を持たせて構成の年代を捉えると、この段階の堅穴住居としては、SB01、SB07、SB10、SB12、SB13が上げられる。

この段階の中には、SB01とした大型住居を含む点を大きな特徴とする。そして、その分布は、一般的な大きさを示す堅穴住居址群が南側に集中し、間隔を開けて北側で大型住居であるSB01が築かれている様子が分かる。一辺873cmを測るSB01は、881cm×825cmの面積を有する丸ヶ谷戸遺跡SB02と同等の規模を測る当地域最大級の堅穴住居となる。丸ヶ谷戸遺跡SB02が全長26m

を測る前方後方形周溝墓に直接関連する竪穴住居であり、首長層に関連するものである事が明らかであるが、このように、大型住居が階層性を反映するのならば、SB01は、一般集落における非日常性の強い竪穴住居として、遺跡自体の特性を表しているものと考えられるのである。駿河湾東岸域において、850cmを超える規模を持つ古墳時代前期の竪穴住居は、前期前半の北神馬土手遺跡SB558、同SB403、同SB514や大麻遺跡B住居址などが類例として取り上げられる程度で、その数は少ない（鈴木1998）。

大麻III式期とした段階の中で捉えられ竪穴住居は、SB02、SB05、SB08、SB09である。規模に大きな違いを示さない竪穴が、調査区域の南西側にその分布域を持つ。SB05出土の畿内系の壺やSB09出土の粗製の小型壺や底部穿孔の壺破片など特殊な土器類の出土が目立つ段階でもある。この段階の竪穴では、平面の方形規格が普遍化したようで、一様に竪穴のコーナー部が直角を指向する。

大麻IV式期の竪穴住居としては、SB03、SB06、SB11、SB14を取り上げることができる。この段階の大きな特徴としては、SB03、SB11などの規模の小さな竪穴住居址やSB06のような長方形の平面形を示す竪穴住居址の登場が上げられる。

竪穴住居の形態の違いからその変遷を辿ると、大麻I式期～大麻II式期段階における大型住居の登場に伴う住居址間の階層差と、大麻IV式期における小型の竪穴住居の登場が象徴する住居址の多様化を示す点が指摘されるのである。

このような変遷を辿る集落の中で、SB09、SB10、SB11において特徴的な石組み炉が発見されている。継続的なその採用と共に住居間の偏差が認められ、採用した住居の性格差を考えなくてはならないものとなっている。

3. おわりに

神祖遺跡のある地域には、墓域の中心となる丸ヶ谷戸遺跡が既に発見されている。その墓制に対応する首長層の居館がどこにあったのか、近年の発掘調査成果により泉～東田遺跡の潤井川の沖積地やこの神祖遺跡の地域がその候補地として取り上げられるようになっている。全体の集落構造がいずれも判明していないため具体的な関連までは言及できていない。「中心領域」としてのそれぞれの経営形態を、今後、検討していかなければならぬのである。

発掘調査にあたり、地権者の遠藤のり江氏には現地の調査から本書の刊行まで多大な協力を

していただいた。文末ながら記して感謝申し上げる次第である。

＜文献＞

愛知県埋蔵文化財センター1990『廻間遺跡』

岩本貴2000「大麻式大型壺の転用」『研究紀要』第7号（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所

川村浩司1993「小型先頭鉄形土器考」『博古研究』第5号『古墳出現期土器の研究』2003再録

新名強2000「二重口縁壺からみた伊勢湾岸」『S字窓を考える』東海考古学フォーラム

鈴木敏則1998「地域名説 静岡県」第8回 東日本埋蔵文化財研究会 古墳時代の豪族居館をめぐる諸問題

富士宮市教育委員会1981『月の輪遺跡群』

山梨県教育委員会1997『西田遺跡』

No	回数	出土地点	埋掩形態	口径	底深	周長	幅	厚さ	重さ(g)	材質	残存状況	備考
1	17	S B 0 1	袋	38	白色砂粒、赤色砂粒が目立つ 白色砂粒、石英、雲母	普通	にぶい褐色	底部全周	凸底			
2	17	S B 0 2	袋	(12.2)	白色砂粒、石英、雲母	やや軟質	にぶい褐色	CIN U 464 下	S字縫			
4	17	S B 0 2	袋	(11.0)	白色砂粒、赤色砂粒の剥離	やや軟質	にぶい褐色	削1/3				
5	17	S B 0 2	袋		白色砂粒、赤色砂粒を含む	堅質	にぶい褐色	脚部全周部	外側2.2付着			
6	17	S B 0 5	丸	12.1	238 白色砂粒、赤色砂粒、藍色砂粒 石英、雲母、白色砂粒	やや軟質	0.95~1.1褐色 (内) 黄褐色	はさみ生存	外底膨張、一次加熱			
7	17	S B 0 5	丸	9.2	石英、雲母、白色砂粒	やや軟質	0.95~1.1褐色 (内) 黄褐色	削1/2	内部入ス付着			
8	17	S B 0 5	袋	10.3	石英、雲母、白色砂粒	やや軟質	にぶい褐色	脚部部	S 0.1 壁上崩出			
9	17	S B 0 5	丸	(5.2)	薄かく白砂粒、黑色砂粒	普通	白	削1/2(1.2)	外側2.2付着			
10	17	S B 0 5	袋		白色砂粒が目立つ	普通	にぶい褐色	小破片	内部曲線跡			
11	17	S B 0 6	丸	(4.0)	白色砂粒、赤色砂粒が目立つ	普通	にぶい褐色	底1/3				
12	17	S B 0 8	丸	(12.4)	細かく白色砂粒が剥離	やや軟質	0.95~1.1褐色 (内) 黄褐色	削1/2(1.3)	脚部底以外、円孔、口部外側又付着			
13	17	S B 0 8	丸	(14.0)	白色砂粒、赤色砂粒が少量	やや軟質	0.95~1.1褐色 (内) 黄褐色	1/4以下	外側剥離、丸孔			
14	17	S B 0 8	袋	(9.7)	灰岩、薄青、蓝色砂粒	やや軟質	にぶい褐色	1/4以下	外側2.2ケズリ、S B 0.6底土?			
15	18	S B 0 9	丸	9.5	白色砂粒、赤色砂粒	やや軟質	にぶい褐色	削1/2(2.0)	内部入ス付着			
16	18	S B 0 9	小型丸	6.2	6.2 赤めがけく、白色砂粒を含む	やや軟質	にぶい褐色	CIN 2/3次				
17	18	S B 0 9	小型丸	6.0	(2.0)	白色砂粒、赤色砂粒	やや軟質	にぶい褐色	1/3			
18	18	S B 0 9	小型丸	(4.4)	4.7 白色砂粒、赤色砂粒を少量	やや軟質	反対側に0.5~1.1褐色	1/4	二次加熱			
19	18	S B 0 9	高杯	22.0	細かく白色砂粒、白色砂粒	普通	0.95~1.1褐色 (内) 黄褐色	CIN 2/2	内部入ス付着、底1/2~1.1削れ			
20	18	S B 0 9	高杯		細かく白色砂粒、白色砂粒	普通	0.95~1.1褐色 (内) 黄褐色	脚部全周	円孔、内部入ス付着、S B 0.1~1.1側面			
21	18	S B 0 9	丸	(14.8)	白色砂粒、赤色砂粒	やや軟質	0.95~1.1褐色 (内) 黄褐色	CIN 1/4以下	口縁付柄文			
22	18	S B 0 9	丸	(8.4)	白色砂粒、赤色砂粒	普通	にぶい褐色	底1/3	内部入ス付着			
23	18	S B 0 9	丸	(7.2)	石英、黒岩、白色砂粒の剥離	普通	にぶい褐色	口縁1/2	赤			
24	18	S B 0 9	丸	(5.9)	白色砂粒等の剥離	やや軟質	0.95~1.1褐色 (内) 黄褐色	底1/3	底面剥離後底面			
25	18	S B 0 9	袋		石英、雲母	硬質	反対側	小破片	S 2.0、輸入品			
26	18	S B 0 9	丸		灰岩、薄青、白色砂粒等	普通	にぶい西原風 (内) 黄褐色	脚部全周	S 2字縫			
27	18	S B 0 9	袋	(10.7)	石英、雲母、白色砂粒	やや軟質	0.95~1.1褐色 (内) 黄褐色	削1/2	S 2字縫			
28	18	S B 1.0	丸	(18.7)	白色砂粒、黑色砂粒等の剥離	やや軟質	にぶい褐色	口縁1/3	口縁凸面 (コナデ)			
29	18	S B 1.0	丸	(4.6)	白色砂粒、黑色砂粒	普通	反対側	円孔	表面剥離			
30	18	S B 1.0	高杯	13.2	赤色砂粒、白色砂粒	やや軟質	にぶい褐色	削1/2	内側入ス付着、S B 0.1~1.1側面			
31	18	S B 1.0	高杯		細かく白色砂粒、赤色砂粒	やや軟質	にぶい褐色	1/3	円孔			
32	18	S B 1.0	高杯	(16.0)	白色砂粒、黑色砂粒等の剥離	やや軟質	にぶい褐色	小破片	底面剥離? 利文刃、内曲形残			
33	19	S B 1.1	丸	21.0	石英、雲母、白色砂粒	普通	にぶい褐色	脚部欠損	筋状文、外側入ス付着、表面ハクリ			
34	19	S B 1.1	丸		白色砂粒、白色砂粒	軟質	反対側	筋状文、表面ハクリ	筋状文、外側入ス付着			
35	19	S B 1.1	丸	12.6	石英、雲母、白色砂粒	硬質	にぶい褐色	削1/2	5字縫、外側入ス付着			
36	19	S B 1.1	丸	(8.0)	12.0 細かく白色砂粒、雲母、白色砂粒	やや軟質	0.95~1.1褐色 (内) 黄褐色	削1/2	S 2字縫、表面ハクリ			
37	19	S B 1.1	丸	(4.7)	白色砂粒、石英、赤色砂粒	普通	にぶい褐色	1/4以下	底面剥離後底面			
38	19	S B 1.1	丸	(6.3)	白色砂粒、赤色砂粒	普通	にぶい褐色	1/4以下	1/4以下			
39	19	S B 1.1	丸	(4.7)	石英、赤色砂粒	普通	にぶい褐色	1/4以下	外側剥離? 表面ハクリ			
40	19	S B 1.1	丸	2.8	白色砂粒、赤色砂粒	普通	にぶい褐色	1/4以下	筋状文、表面ハクリ			
41	20	S B 1.3	丸	(19.6)	29.4 白色砂粒、赤色砂粒	普通	にぶい褐色 (内) 黄褐色	削1/2	壁部底面底面骨、外側入ス付着			
42	20	S B 1.3	丸	19.1	白色砂粒、黑色砂粒、赤色砂粒	普通	にぶい褐色 (内) 黄褐色	削1/2	壁部底面底面骨、外側入ス付着			
43	20	S B 1.3	丸	(2.0)	白色砂粒、赤色砂粒	普通	にぶい褐色	1/4以下	口縁剥離? より複雑			
44	20	S B 1.3	丸	4.4	白色砂粒、赤色砂粒	やや軟質	にぶい褐色	削1/2	底面剥離			
45	20	S B 1.3	丸	(12.0)	白色砂粒、赤色砂粒	やや軟質	にぶい褐色	1/4以下	底面剥離? タクミキ			
46	20	S B 1.4	丸	(15.2)	石英、雲母、黑色砂粒等の剥離	やや軟質	にぶい褐色 (内) 黄褐色	1/4以下	表面剥離? タクミキ			
47	20	S B 1.4	丸	(2.0)	白色砂粒、赤色砂粒	普通	にぶい褐色	1/4以下	口縁内側底面骨、小円孔、複雑調査			
48	20	S B 1.4	丸	(12.0)	白色砂粒、赤色砂粒	普通	にぶい褐色	1/4以下	複雑調査			
49	20	トレンチ	袋	10.4	石英、雲母、白色砂粒等の砂礫	やや軟質	(内) にぶい褐色 (内) にぶい褐色	脚部缺	複雑調査			

第2表 土器観察表①

No	回数	出土地点	埋掩形態	胎土	形成	色調	備考
50	21	S B 0.8	袋	白色砂粒、赤色砂粒	やや軟質	にぶい褐色	凸底、封定期、蓋式文
51	21	S B 0.9	丸	石英、白色砂粒、赤色砂粒	普通	にぶい褐色	口縁コナデ、外側入ス付着
52	21	S B 0.9	丸	石英、赤色砂粒	やや硬質	にぶい褐色	ヒツジ型、横模文、封定期、蓋入品?
53	21	S B 1.0	丸	白色砂粒	削離	にぶい褐色	口縁剥離文、外側入ス付着
54	21	S B 1.0	丸	白色砂粒、赤色砂粒	やや軟質	にぶい褐色	肩部外形 S 1/4ケメ、錐部内彂ヨコハケメ
55	21	表土中	丸	白色砂粒、赤色砂粒	やや硬質	にぶい褐色	横模文、剝離の羽状文
56	21	表土中	丸	白色砂粒、黑色砂粒	やや軟質	にぶい褐色	口縁内形、肩部外形、横模文
57	21	S B 0.9	袋	石英、白色砂粒	硬質	灰色	底底難
58	21	トレンチ	丸	石英、白色砂粒	硬質	反色	底底難 タクミキ、隕頭調査
59	21	S B 1.0	丸	白色砂粒、赤色砂粒	やや軟質	(外) 0.95~1.1褐色 (内) 黄褐色	縦文土器 印彌文
60	21	表土中	丸	白色砂粒、黑色砂粒、赤色砂粒	普通	にぶい黃褐色	縦文土器 略名寺式
61	21	S B 1.1	丸	白色砂粒、石英	普通	(内) にぶい黃褐色 (内) 黄褐色	縦文土器 鮎利式
62	21	S B 0.6	丸	白色砂粒、赤色砂粒等の砂礫	普通	にぶい褐色	縦文土器 鮎利式

第3表 土器観察表②

No	回数	出土地点	埋掩	長さ	幅	厚さ	重さ(g)	材質	残存状況	備考
2	17	S B 0.1	低石	(10.0)	3.1	2.9	46.7	花崗岩	1/2存	S B 0.1複土中、多箇体
63	21	S B 1.0	石鰯	(1.5)	1.6	0.5	0.8	黒墨石	脚部欠損	有茎?

報告書抄録

ふりがな	かんぞ いせき							
書名	神祖遺跡							
副書名	宅地造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
卷次								
シリーズ名	富士宮市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第41集							
編著者名	渡井英蕃							
編集機関	富士宮市教育委員会							
所在地	〒418-8601 静岡県富士宮市弓沢町150番地 Tel.0544-22-1187 (教育文化課)							
発行年月日	平成21年3月20日							
所収遺跡	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町	遺跡番号					
神祖遺跡	静岡県 富士宮市 小泉字神祖 1577番1	22207	市番号18	35° 13'	138° 38'	20080618 ~	532m ²	宅地造成工事
			県番号94	44"	04"	20080806		
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
神祖遺跡	集落	古墳時代前期	竪穴住居址14	土師器、砥石		弓沢川左岸域の丘陵上に展開する古墳時代前期集落遺跡の調査		
		古墳時代後期	溝状遺構1	須恵器		大型住居と特異な石組み炉の発見		
		近世	溝状遺構1					

富士宮市文化財調査報告書 第41集

神祖遺跡

—宅地造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

平成21年3月20日

編集 富士宮市教育委員会

発行 富士宮市教育委員会

〒418-8601

静岡県富士宮市弓沢町150番地

(0544) 22-1111㈹

印刷 三扇美術印刷株式会社

〒418-0056

富士宮市西町1番15号

(0544) 26-3636㈹

写真図版 1



写真1 調査区全景(南西部)



写真2 調査区全景(南東部)



写真3 SB01



写真4 SB06



写真5 SB09～SB12



写真6 SB09 炉址

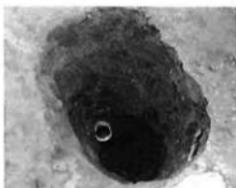


写真8 SB09 貯藏穴



写真9 SB11 壺(No.33)出土状況



写真7 SB11 炉址



写真10 SB13



写真11 SB13 炉址



写真12 SB01 出土遺物



写真13 SB05 出土遺物



写真14 SB09 出土遺物①



写真15 SB09 出土遺物②



写真16 SB10 出土遺物



写真17 SB11 出土遺物①



写真18 SB11 出土遺物②



写真19 SB11 出土遺物③



写真20 SB13 出土遺物①



写真21 SB13 出土遺物②

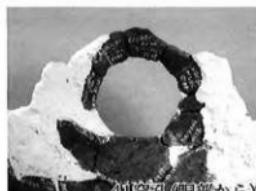


写真22 SB13 出土遺物③

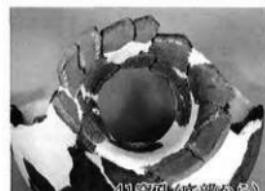


写真23 SB13 出土遺物④